筑波大学新聞

第335号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
福原直樹
TEL. 029(853)2040・6699
E-mail shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月　刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

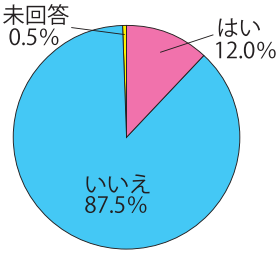
本紙調査　インターンへの意識聞く

経験者全国平均割る

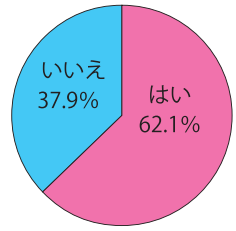
1997年に文部省（現在の文部科学省）などが学生を対象としたインターンシップ（インターン）に関する基本的な考え方を定めてから今年で20年。これを受け、本紙では筑波大生のインターンの利用経験の有無やその理由などに関するアンケートを228人に実施。何らかのインターンに参加経験がある学生は入学して間もない1年生を除いた2～4年生で12％だった。文科省が15年8～9月に行った調査では、前年度に全国でインターンに参加した大学生が22・2％であり、筑波大生の参加率は全国平均を割った。また、現段階で参加を希望しない筑波大生は参加経験がない学生全体のうち37・9％となった。

（石川泰行＝社会学類3年、6、7面に関連特集）

インターンに参加したことはあるか（2～4年）



インターンに参加したいか（未経験者）



228人にアンケート

アンケートは学群生を中心に実施。その結果、全体でインターンの存在を知っていると答えた学生は89・5％で、インターンに参加経験がない学生は89・9％、その中で参加したいと思わない学生が37・9％だった。また、インターンへのイメージについては、良いイメージを持っている学生は86・9％となった。

97年に現在の文科省、経済産業省、厚生労働省の3省庁が合同で発表した「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」では、インターンを「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」と定義。人材育成に大きな意義があるとの観点から官・民・高等教育機関が連携して積極的に推進していくことを表明した。

今年も民間企業を中心に採用活動に先駆け、来年に就職活動を控えた学生を主な対象としたインターンの募集が始まるほか、国会議員や地方議員のもとでの議員インターンなど全国でさまざまなインターンが行われている。

昨年、リクルートキャリア（東京都千代田区）が行った調査では、新卒採用を実施している企業のうち、インターンを実施している企業は60％に上ったほか、文科省が昨年発表した調査ではキャリア教育の一環としてインターンを単位認定する大学は筑波大を含め70％以上と、どちらも年々増加傾向にあり、インターンの重要性が認識されてきている。

撮影・佐藤巧基＝物理学類2年

つくば歳時記

風薫る5月、新緑に包まれた小道で小鳥がさえずる。散歩する学生は気持ち良さそうだ。明るい日差しのもと、過ごしやすい初夏の1日……。

筑波大がアリーナ建設を検討

2020年をめどに

筑波大学が2020年をめどに、スポーツや音楽などのイベントを行う「アリーナ」の建設を検討していることが財務部などへの取材で分かった。

（徳永翼＝日本語・日本文化学類3年）

候補地は春日エリアや筑波大の職員宿舎跡地（つくば市吾妻）などで、収容規模は7～8000人を想定。建築や運営のための特別目的会社の新設と、民間資金などでの財源確保を考えている。

大学運動部の大会やプロバスケットボールのリーグ戦、音楽イベントなどを開催するほか、飲食店やシムなどを併設し地域住民に利用してもらい、収益を上げられる施設を目指す。財務部などによると、計画は3月末から検討を開始。今後調査の上、建築場所や規模など概要を決める。

筑波大は国立の総合大学として唯一の体育系学群を持ち、スポーツや健康、医療などの多様な分野で研究の蓄積がある。永田恭介学長は4月20日の定例記者会見で「大学の教育や研究の成果を生かした活用を目指していきたい」と述べた。

◆

大学の敷地内にアリーナを建設する際にはどのようなメリットやデメリットがあるのか。環境デザインが専門の渡和由准教授（芸術系）に聞いた。

――アリーナ構想をどう思うか。

単なる競技場としてではなく、複合的な機能を持たせることを考えている点は良いと思う。イベントだけを行う施設だと市民の賛同を得られない可能性もある。スポーツ観戦の来場者がくつろげるカフェやレストランなどのほか、スポーツ選手がコンディションをいかに整えるかを住民が教わることができるなど、一般の人が興味を持つ機能が必要になるだろう。また、駅や公園にも近い立地なら美術館や市の研究所との連携も考えられる。

――大学の敷地内に作る際の利点は。

研究や実習の場として住民と学生、研究者が触れ合える空間や文化施設・商業施設があれば、大学に建設する利点が出てくるのではないか。つくば市の姉妹都市・米国アーバイン市のカリフォルニア大学アーバイン校では、敷地の横にショッピングモールがあり、学生だけでなく周辺住民などに親しまれている。映画館、音楽ホール、運動施設も充実している。

――建設への懸念は。

まず、交通の問題が挙げられる。人を集めるには大きな駐車場を作る必要が出てくる。アリーナが8000人規模と仮定すると、例えば、ピーク時にはつくば市研究学園にあるイーアスつくばの駐車場（4000台規模）と同じ規模の駐車場が必要になるのではないか。それだけの人数が来た場合、建設が検討されるつくば駅周辺の道路は、激しい渋滞が起こる可能性が高い。

また周辺には学校やマンションも多く、渋滞や騒音などの理由で建設に批判的な意見も出ると思われる。ただ、駐車場を離れた場所に作りバスで来場者を輸送するなどの対策は可能だ。

――収益は。

どのようなイベントを開催するかによる。米国の大学にはアメフト競技など多種のスポーツ施設、さらに商業施設が複合化している地区がある。米国にはスポーツを応援する文化が根付いているため、経営が成り立つ。日本にはそういった文化が根付いておらず、地域向けのイベントを行っても見込める利益は少ないため、首都圏全体を視野に魅力的なイベントを開催する必要があるだろう。

また、東京周辺と比べて賃料が安いなど、つくばならではの利点があれば良さそうだ。これらの課題を乗り越えれば、つくばセンター地区の再生にも大きく寄与すると考える。再開発のノウハウを持つ都市再生機構（UR）などの機関に協力を求めれば、良い方向に向かうのではないか。

注目記事

空洞化進むつくば駅前　2
記者の声「軍事研究」　4
Doo－Wop春ライブ　5
男子バスケ関東2連覇　8
学内に移動スーパー　10
「結2号」受信体験会　11
ミニ特集　3
復興支援
大学は何をできるか

油絵の保存処置を行う学生たち

特集　6,7
筑波大から考えるインターン

筑波おろし

ストリートダンスの一種であるロックダンスは1970年代の米国で生まれた。創始者のドン・キャンベルは、当時流行していたダンス「ファンキーチキン」の滑らかな動きができず、周囲から笑われていたずれも、初めての経験で、さまざまな人々と出会えた。要は自分の考え方次第なのだ。失敗を失敗と思わず、置かれた場所で咲けばいい、と考える。人生万事、塞翁が馬とも▼キャンベルは、笑われながらも個性を守り続けた。彼に見習い、他人にどう見られても自分を貫ける強い人間になりたいと思う。今は、筑波大で出会った尊敬する教授の下で日本語の格助詞について研究する。著名な言語学者の多い筑波大に感謝する。

▼どうしても滑らかに動けず、止まってしまう。それでもキャンベルは自分のダンスを踊り続けた。それを周囲のダンサーが面白がり真似たことで、ロックダンスが生まれた。ロックは静止するという意味で、今や、ロックダンスはストリートダンスの主流の1つだ▼筑波大学に入学して2年がたった。受験生の時は他の大学を目指しており、筑波大に入学した時は、「失敗」「妥協」と見られるかもしれないと考えた。それでも、入学時に決意した。「筑波大でしかできないことをやろう」と▼ストリートダンスサークルに入って、舞台で踊った。筑波大学新聞の記者として地元の警察も回った。いずれも、初めての経験で、さまざま

空き教室で礼拝可能に

宗教への対応方針発表

筑波大学は4月13日、個人の信仰に基づく礼拝や瞑想についての対応方針を発表した。方針では正式な礼拝所の確保などは難しいとしながらも、礼拝などのために空き教室など学内の施設が利用可能であると明文化、利用方法などを定めた。国立大が宗教に関する方針を発表するのは全国でも例が少ない。

方針では礼拝などについて▽2名以上で行う場合は集会願を提出する▽共用スペースや実験室、実習室では行わない▽学外からの参加者は認めない▽授業時間と重なる場合は学業を最優先する……などの注意事項を記載した。

これまで筑波大では礼拝に関する統一した方針がなく、部署ごとに対応が異なっていた。

筑波大では近年、ムスリム（イスラム教徒）など定期的な礼拝が必要な留学生が増加。それに伴い学生生活課などに「（礼拝）場所がなく、トイレで行うしかない」「教職員らしい人から、学内で礼拝をしてはいけないと注意された」などの相談が相次いでいた。また、「礼拝で使用するカーペットが敷かれたままだ」などの苦情も増えていた。

今回の方針作成で学生生活課は「さまざまな信仰を持った学生や教職員が安心して生活できるようになってほしい」と話している。この方針は大学のホームページで閲覧できる。

また4月に運用を開始し、留学生と日本人学生が混在するグローバルヴィレッジのコミュニティステーションにはメディテーションルーム（瞑想室）と足洗い場が設置され、礼拝が行える。（越智小夏＝比較文化学類2年、写真も。2面に識者と学生の声）

メディテーションルームの入口前に設置された足洗い場（5月9日、グローバルヴィレッジで）

空洞化進むつくば駅前

公務員宿舎 次々廃止

防犯上の問題に懸念も

つくば駅周辺のつくば市竹園、吾妻、並木、松代地区に2012年時点で、約3800戸あった国家公務員宿舎が、最終的に1200戸になることが、つくば市への取材で分かった。1980年には約8000戸があったが、入居者がつくばエクスプレス沿線などに住宅を購入するなどして空洞化が進行。徐々に売却され、現在の状況になった。だが、今でも住民が減少し続ける宿舎では防犯上の問題も懸念され、同市は新たな駅前再開発の立案に迫られている。

（徳永龔＝日本語・日本文化学類3年、石川泰行、小宮山瑛生＝社会学類3年）

吾妻地区の宿舎のひとつ。周囲には草木が茂っている（5月9日、つくば市吾妻で）＝佐々木悠里撮影

つくば市学園都市市街地振興室などによると、つくば駅前周辺の国家公務員宿舎は、1960年代の研究学園都市の計画を受け建設を開始。80年には7755戸が建設され、多くの研究者が入居した。

だが2001年、宿舎のうち約1600戸は研究・教育機関の法人化で各機関に移管され、残る約6100戸が国家公務員用に残された。

この間に、研究学園地区では民間業者の住宅建設が進み、公務員宿舎から入居者が退去して移住した。また05年のつくばエクスプレス開通で、他地域からの通勤も容易となり、宿舎の入居者は減少した。

これらの状況を受け、国は空き家の多くなった宿舎の売却を決定。宿舎は12年までに約3800戸にまで削減され、今後も売却を進める予定だ。

同室によると、廃止が予定される宿舎などでは多くの居住者が転居。空き家が増加しており、本紙の取材では一部では約1～2割しか住んでいない。

つくば市は、13年5月に「つくば中心市街地再生推進会議」を設置。新たなまちづくりを進めているが、宿舎の一部は買い手がつかないなどの課題も顕在化している。

■つくば駅前ルポ

つくば駅から徒歩5分ほどの吾妻3丁目では、昨年度に売却された宿舎が取り壊され、今でも数台の重機がコンクリートなどの撤去を行っていた。道を挟んだ向かい側は同2丁目。売却計画に入っている宿舎とそうでないものが混在するが、樹木が伸びきっている。

棟の合間にある公園の砂場には落ち葉がたまり、滑り台は錆び付いていた。

30年度に売却予定の11棟の入り口には退居を促す張り紙がされ、ある棟では、36戸のうち入居中はわずか3戸。別の棟でも、8戸のうち2、3戸が多く、地区は閑散として人の気配はない。

夫が国家公務員という住民によると、「周囲は木が茂っていて暗い上に人が少なく、夜の帰宅時は怖い」という。この住民は数年前までは、近くの宿舎に住んでいたが、そこは売却が決まり、今の棟に引っ越してきた。

だがその後、今の棟も売却されることになり、今年の秋から近く別の宿舎に引っ越す予定という。「次の宿舎もいつ売却対象になるか分からない。子どもがおり、数年単位の引っ越しは負担」と話す。

夫の退職後は別の市で家を建てる予定という。

宿舎に入居しているのは50～60歳の人とその家族がほとんどという。「若い人は（宿舎は）近い将来に潰れると思い、入居しない」とため息をついた。

このほかは、1時間ほど地区を歩いたが、別の住民には出会えなかった。

（田中開＝教育学類4年）

宗教対応方針

識者「当事者間の話し合い必要」

【1面参照】今回発表された、筑波大学の宗教に関する対応方針について、識者や実際に礼拝を行う学生に話を聞いた。（越智小夏）

◆識者の声

宗教社会学が専門の山中弘教授（人社系）に話を聞いた。

――今回出された方針の内容について、どう考えるか。

筑波大の法人規程に書かれた宗教に関する細かな記述などに配慮された内容だと思う。ただ、礼拝を行う際の注意事項などの細かい内容に関しては、それぞれの事情に合わせて話し合うべきではないだろうか。

特に、礼拝の時間と授業時間が重複した場合は授業を最優先することを定めた点に関しては、臨機応変に対応する必要がある。例えば、同じムスリムであったとしても、厳格に礼拝の時間を守っている人と、さまざまな事情でそうできない人もいるだろう。授業の担当者と学生が話し合う必要があるかもしれない。

日本は他の国に比べ宗教への対応が遅れており、対応方針を持っていない大学がほとんどだろう。しかし、筑波大は以前から、東南アジアや中央アジアなどイスラム圏からの留学生が多い。このことを踏まえると、この時期の対応方針の発表は少し遅い印象を抱く。

――今後の課題は。

対応方針が単なるスローガンに留まり、形骸化してはいけない。大学の方針として打ち出した以上は、今後も苦情や意見にも対応する必要があるため、教職員も、さまざまな宗教への理解や知識を深めることが求められているように思う。

◆学生の声

インドネシア出身のムスリムの学生に話を聞いた。

――今まで大学内では、どのように礼拝を行ってきたか。

主に空き教室や階段の踊り場で行い、（ムスリムは礼拝の際、心身を清浄に保つため）洗い場がない場所で礼拝をする場合は、足を洗う時に霧吹きを使うなどして工夫してきた。

礼拝を行う際に、困ったことなどは特になかったが、礼拝用として教室を開放してくれたらありがたいと思っていた。

――今回出された方針の内容についてどう考えるか。

授業を最優先すべき、との項目に関しては、礼拝自体は5分程度で終わるため、後で内容を先生や友人に聞けば、途中で抜けても問題ない授業もある。どちらを優先するかは個人に決定させてほしい。

大学スポーツの改革先導

「日本版ＡＤ」筑波大に設置へ

筑波大学は4月1日、大学スポーツの活性化を目指す「スポーツイノベーション開発研究センター」を設立した。米国では全国的組織を設けて一元的に大学スポーツ界を運営しているのに倣い、日本でも同様の組織を設置することを視野に、足並みのそろわない日本の大学スポーツ界の改革を先導していく方針だ。

米国のほとんどの大学は、全運動部を一括して運営する学長直轄の学内部局「アスレチックデパートメント」（ＡＤ）を設けている。更に全米の大学約1100校が加盟する「全米大学体育協会」（ＮＣＡＡ）が各大学のＡＤをとりまとめ、練習時間の上限や競技中の安全管理の水準などを全国的に定めており、試合日程の放映権なども管理。年間約1000億円の収入を得て加盟大学に分配するほか、大会運営費などに使っている。

一方、日本では大学の体育会のほとんどを学生が個別に運営しており、大学が運営に携わることは少ない。また連盟などの全国的組織は競技ごとに設けられるのみで、競技間の連携不足や資金難など多くの問題点が指摘されてきた。こうした現状を受け、同センターでは筑波大にＡＤを設置した上で、全国的に日本版ＡＤや日本版ＮＣＡＡの設立を推進していく考えだ。

現在は、学内にＡＤを設置しＮＣＡＡにも加盟している米国のテンプル大学とミネソタ大学から定期的に筑波大へ教員を招致。昨年11月に協定を締結した米国のスポーツブランド「アンダーアーマー」の日本総販売代理店・ドーム（本社・東京都江東区）を加えて、筑波大へのＡＤ設置に向けた検討と準備を進めているという。

また筑波大は、両大やドームとともに、スポーツ産業の拡大に向けた研究会やシンポジウムを開催している。同センターでは今後、こうした動きを支援するほか、スポーツ庁などと連携して全国的な大学スポーツの振興につながる研究活動を行う予定だ。

山田幸雄センター長（体育系・教授）は、「大学スポーツの活性化は、スポーツ関連の研究や体育会の活動が盛んな筑波大の責務だ。センターの設置をきっかけに、筑波大が先頭に立って日本の大学スポーツ界を盛り上げていきたい」と話した。（益本健太＝人文学類2年、写真も）

取材に応じる山田センター長（4月27日、体育センターで）

南極望遠鏡

「暗黒銀河」解明へ

1千万円目標にクラウドファンディング

中井直正教授（数物系）を中心とする筑波大学宇宙観測グループは4月18日から、光では観測できない「暗黒銀河」を観測する天体望遠鏡のためのクラウドファンディングを始めている。最終的には南極に建設を計画しており、6月30日までに1000万円を集めるのが目標。5月11日現在で約240万円が集まっている。

建設を計画している電波望遠鏡のイメージ図＝中井教授提供

銀河誕生は約130億年以上前。宇宙全体の銀河の約7割を占めるとされる「暗黒銀河」も、誕生当時から存在すると考えられている。だが暗黒銀河が出す光は宇宙のちの影響などで観測できていない。

このため同グループは、地球から約130億年以上先の「暗黒銀河」の観測を目的に2024年をめどに、南極内陸部に口径10㍍の電波望遠鏡の建設を計画。南極内陸部は、大気中の水蒸気量が非常に少ないなど天文観測を行う上で最適な環境で、望遠鏡が完成すると銀河誕生の謎が解明される可能性が出てくる。

今回のクラウドファンディングで集めた資金は同グループが開発中で南極の電波望遠鏡に搭載される予定の「広視野超伝導電波カメラ」の開発費に使われる。

また、今冬、国立天文台の野辺山45㍍電波望遠鏡（長野県南牧村）で、このカメラを用いた試験観測が予定されており、その費用にも充てられる。

同グループは、これまで開発費として日本学術振興会から科学研究費・約3500万円を得たが、それだけでは資金が不足したため、クラウドファンディングを始めた。中井教授は「この研究は銀河が発見され90年経った現在でも謎が多い銀河形成の解明にとって不可欠だ。日本の天文学の発展のためにも協力してほしい」と話している。

（佐藤巧基＝物理学類2年）

トヨタと共同研究開始

新たな産学連携目指す

筑波大学はトヨタ自動車と共同で4月1日、先進技術を用いて地域未来の社会基盤づくりを研究開発する「未来社会工学開発研究センター」を設立した。5年間で農業人口の減少など、地域未来の課題の解決のための政策提言などを行う。

筑波大からは櫻井鉄也教授（システム情報系）らが中心となり人工知能やビッグデータの研究を行う「人工知能科学センター」や、睡眠研究を行い、柳沢正史教授が機構長を務める「国際統合睡眠医科学研究機構」など7つの研究組織が参加。今後、通信技術などの研究を行う企業や研究機関なども参加する予定だ。

通常、産学連携は企業1社・1研究チームで行われるが、複数の企業・研究組織が共同で研究をすることは珍しいという。また、茨城県や常総市などの自治体とも連携し、開発した技術の実証実験などを行うことも検討しているという。

国際産学連携本部審議役の内田史彦教授は「幅広い分野で研究が行われている筑波大だからこそ今回のような産学連携が実現できた。このセンターが産学連携の新たなモデルになるよう今後活動していきたい」と語った。

（岡田優太＝社会学類3年）

復興支援　大学は何をできるか

熊本地震から1年 4分野の教員に聞く

甚大な被害をもたらした昨年4月の熊本地震から1年。筑波大学のある茨城県も、いまだ東日本大震災や常総水害からの復興途上にある。総合大学である筑波大はどのような形で災害復興に貢献できるのか。保存科学、社会心理学、文化人類学、都市計画の4分野の教員に聞いた。（益本健太、佐々木悠里＝人文学類、越智小夏＝比較文化学類、徳永翼＝日本語・日本文化学類、石川泰行、小宮山瑛生、前名裕一＝社会学類）

東北各地で「安定化」実施

松井敏也 教授
芸術系・保存科学

保存科学は文化財保存のため、その腐食や劣化の進行を止める技術を開発したり、保存環境の在り方などを研究する。松井敏也教授（芸術系）は東日本大震災後、岩手県山田町や宮城県石巻市などから要請を受け、被災文化財の保存を行ってきた。地震や津波などで損傷した文化財に、汚れの除去や海水の塩分除去など「安定化」と呼ばれる保存処置を施し、文化財を展示や保管が可能な状態まで戻す作業を行っている。

特に力を入れてきたのは、「鯨と海の科学館」（岩手県山田町）での取り組み。同科学館は鯨の骨格標本や漁労具などを展示し、捕鯨史を伝えているが、教授は震災直後に同町の要請を受け、資料の安定化を開始。安定化が必要な資料はまだ残っており作業を続けるが、これまでの努力で、震災以降休館していた同館は、7月に開館できるまでこぎつけた。

また、熊本地震では、熊本県御船町の求めに応じ、昨年10月から同町出身の画家・故田中憲一さんのアトリエにあった油絵作品の処置を始めた。絵の具が剥離したりキャンバスに亀裂が入った作品を筑波大に移送。キャンバスから剥がれた絵の具を再び接着させるなどの処置を行っている。

行政による文化財などの保存は予算などに限りがあり、被災文化財全ての安定化は難しい。このため教授は大学の役割を「国や地方自治体などでは対応しきれない細かい部分を補うこと」だと指摘する。

また松井教授は、「被災地の人々が中心となり文化財を保存できる状況を作り出せるようにするべきだ」と、文化財保存の意識を地域に根付かせることの重要さを指摘した。教授は「住民の手で現地の文化財を守っていけるまでは、支援を続けたい」と話している。

熊本地震で被害を受けた油絵の安定化を行う学生たち（4月28日、芸術系の研究室で）＝益本健太撮影

見落としがちな問題点 探る

木村周平 助教
人社系・文化人類学

文化人類学はさまざまなところで生活する人々と長期間接して彼らの問題を見つけ、一緒に解決策を探る学問。相手を、時間をかけて理解することで、行政が見落としがちな問題を発見できるのが強みだ。木村周平助教（人社系）は、東日本大震災で被災した岩手県大船渡市で5年以上フィールドワークを行っている。

2012年に同市を訪れた際には、聞き取り調査の結果、復興方針を巡り住民間の意思疎通ができていないことに気づいた。このため都市計画の専門家を招き、住民と共にどのように復興を進めるかを話し合った。

空き家に展示された被災地の伝統芸能に関する研究成果を見る来場者たち＝木村助教提供

また、15年には現地の空き家を利用して、被災状況や地域の伝統芸能に関する研究成果を展示した。現地で活動する全国の研究者と協力した成果だったが、この時は、現地の住民が新たな資料を持ち込んでくれたり、展示場で住民同士の交流が進むなど、「住民が地域の理解を深めるきっかけになった」ともいう。

このほか木村助教は、15～16年には大船渡市で学生とフィールドワークを実施。その際学生たちは、被災地では地元産業の衰退や高齢化など、復興以外にも取り組むべき課題が多いことに気づいた。これらは、今後日本全体が直面していく課題だともいえる。

研究成果の展示も

木村助教は「文化人類学は（復興について）他の分野の研究者が見落としがちな問題にも気づくことができる」とし、「少なくとも10年以上は現地に関わっていきたい」と話している。

「惨事ストレス」の研究進める

松井豊 教授
人間系・社会心理学

松井豊教授（人間系）は災害発生後、救援や復興に携わる消防士や自衛隊員、自治体の公務員にかかる心的な負担「惨事ストレス」のメカニズムとその軽減方法について研究している。これらの人々は、被災者の話を聞いたり、被害状況を考える機会が多いため、「自分が支えなければならない」というような責任感を過度に感じ、不安や抑うつ状態などの症状が現れる。

松井教授によると、惨事ストレスは症状が長期化する傾向があるうえ、復興が一段落つく頃に症状が出てくるため、支援の手も届きにくいという。

惨事ストレスは10年ほど前から症状緩和の研究が進んでいる。有力な症状緩和法の一つは「ピアサポート」と呼ばれる、訓練を受けた同業者がストレスを持つ人から話を聞くものだ。

東日本大震災では、2004年10月の新潟中越地震で被災した病院の看護師長が、被災地の病院関係者に手紙やメールを送り、悩みや不安の相談に乗ることで、症状が緩和した例もある。

松井教授は熊本地震の際、被害の大きかった熊本県益城町や阿蘇市を訪れ、どのような支援が必要かなどの判断も行った。松井教授は「熊本地震は被害から1年たちピアサポートの必要性が高まっている。まさにこれから支援を検討するところだ」と話している。

現在、松井教授は南海トラフ地震＝9ページ＝に備え、災害救援者を対象に研修会を開き、ピアサポートを行える人材を育成している。

また、甚大な被害が予想される自治体を中心に、災害発生時に消防や病院関係者が情報交換などを行うネットワークを作りも行っているという。

松井教授は、惨事ストレスの研究者は日本には少ない上、ネットワークづくりも手探り状態だ」と話す一方、「復興で一番活躍してほしい地元自治体の公務員の惨事ストレスを軽減できるよう研究を進めたい」と話している。

9 南海トラフ地震＝日本列島の太平洋沖の海溝である南海トラフ沿いの広い震源域で発生すると考えられている巨大地震。地震の規模を示すマグニチュードは最大9であると予測されており、この規模は東日本大震災よりも大きい。

1月13日には政府の地震調査委員会によって10年以内に発生する確率が20～30％であると発表された。内閣府では南海トラフ地震防災対策推進基本計画の作成など、対策の整備を進めている。

復興目指す会議に参加 外の目から計画提案も

藤井さやか 准教授
シス情系・都市計画

2015年9月の茨城県常総市の水害では、同市周辺を流れる鬼怒川が決壊。広範囲が水没し、大きな被害が出た。この水害に対し、筑波大は医療など多くの分野で同市の復興を支援してきた。

藤井さやか准教授（システム情報系）は14年から大学院の授業で、常総市のまちづくりについて計画と提案を行っていた。だが水害が発生したため、その直後の10月、大学院の授業内容を変更して学生と現地に赴き、同市役所の復興に向けた会議に参加。復興計画の検討を行った。

同市では水害後、農業機具の故障を理由に農業を辞める高齢農家が増加。これに対し准教授と学生らは、市外から若い農家を誘致し、空いた農地を活用する計画などを会議で提案。会議のメンバーからも評価され、実施に向けた検討を進めている。

また藤井准教授は昨年10月、常総市で授業としてフィールドワークを実施。ある住民の「（各戸で）復旧状態に差があるため、住民が互いに気遣っている」との声を受け、住民が気軽に集まれる施設を学生らと計画した。施設は被害を受けた空き家を利用する計画だ。准教授は、大学の災害復興支援の意義について「外の目が入ることで状況を冷静に見られる」と話している。

鬼怒川が決壊し大きな被害を受けた常総市（2015年9月16日、茨城県常総市で）＝石川泰行撮影

取材を終えて

専門的な研究 支援に生かす

実際に復興支援に携わる4人の教員に取材し、被災地で大学が果たす役割の重要性を強く感じた。

教員らが口をそろえて話していたのは、被災者の目線に立ったうえで、大学の持つ専門的な研究を復興支援に生かせることだという。

「大学の強みは『行政の穴を埋めること』と話す教員もいた。行政には予算や時間に限りがあるため、どうしても行き届いた支援をすることが難しいという。大学では、細かなニーズへの対応を柔軟に行える。松井敏也教授は東日本大震災で被災した鯨と海の科学館で収蔵資料の保存を行う傍ら、行政では処置の対象にならない地元住民の持つ地域文献も扱ったという。

一方で、大学などが持つ専門的な技術や知識を災害時にすぐ生かせるよう事前に研究成果を伝えることも重要だ。惨事ストレスを研究する松井豊教授は、このストレスについて一般に知られていない現状を指摘。災害発生時、こうした目に見えにくいリスクについて広く理解がないと、対応は後手に回ってしまう。同教授は講演活動などを通じ、研究成果を普段から伝えているという。

筑波大学によると、こうした復興支援は医療や心のケア、防災などの分野で33件が進行中。また、このほかにも、福島第一原発の事故による自主避難者を対象にした体操教室や、災害時の特別な援助が必要となる障がい者支援についての講演なども行われている。

復興支援にはさまざまな目線が必要となるが、そこでは筑波大の研究の幅広さが役立つだろう。今後もこうした取り組みに注目していきたい。（徳永翼）

記者の声

添島香苗

軍事研究

文理を越えた議論必要
誰もが納得できる指針を

筑波大学の永田恭介学長は3月、大学として軍事研究を禁止する方向で、その指針作りに着手したことを明かした。近年、防衛省が大学などに安全保障関連の研究費を拠出し始めたことから、軍事研究と大学での研究の関係が問われており、この明確な方向付けは評価できると思う。ただ気になるのは学生側の意識だ。本紙が2015年11月、筑波大生600人を対象に行った調査では、学生は全体で軍事研究に比較的寛容な態度を示す一方、文系と理系では大きく意見が分かれてもいた。今後、議論を尽くしたうえで誰もが納得できる指針作成を求めたい。

防衛省が研究費を拠出する制度は15年に開始。防衛省が定めた安全保障関連の研究課題に取り組む研究者を、大学や企業などから募集し、研究費を助成する。平成27年度は計9件（うち大学4件）、28年度は計10件（同5件）が採択された。28年度に6億円だった同制度の予算は、今後110億円となる。

これに対し、戦後、戦争目的の研究を否定する声明を出してきた日本の科学者の代表機関・日本学術会議は3月、この立場を今後も継承していくことを決定。筑波大の指針作成は、この声明を受けたものとみられる。

15年の本紙の筑波大生に対するアンケートでは「日本の大学による軍事転用を見据えた技術研究」について、賛成派が33・5％（201人）で、反対派の27・4％（164人）を上回った。また「どちらともいえない」は38・7％（232人）だった。このうち賛成派201人の内訳は「軍事転用を恐れていたら、民生用の研究も自由にできない」が128人で最多。次いで「大学も日本の防衛力増強に貢献すべきだ」が52人、「世界的には大学が軍事研究をするのは普通」が29人だった。

またアンケート結果で注目すべきは、文系と理系で見解が大きく分かれたことだ。文系331人のうち、軍事研究への反対派は32・1％で、賛成派の26・8％を上回った。一方、理系267人のうち賛成派は42・0％で、反対派の21・8％を大きく上回っている。

これを見ただけでも、大学での軍事研究に対し、筑波大生がさまざまな意見を持っていることが分かる。この状況を反映して永田学長は会見で「我々と同じ基準で考えられるよう、一から学生と議論していかなければならない」と述べてもいる。

翻って、全国の大学でも軍事研究への対応は分かれている。防衛省の制度ではこれまで、東京理科大、東京農工大、北海道大などの研究が採択された。一方、これまでに関西大などが、同制度への応募を認めない方針を決めている。また、東工大は平成27年度に防衛省の制度で研究が採択されたが、4月には、今年度は同制度への応募を認めない方針を決めている。

大学での軍事研究に対してはさまざまな意見がある。だからこそ、学内では文理の壁を超えて議論を尽くす必要がある。大学側と学生が議論する場を設ける、授業で取り上げる、教員同士での議論も積極的に行うなど、大学が一体で考える機会を作るべきだと思う。

議論を尽くしたうえでの指針作成が待たれる。

（生物科学専攻1年）

筑波時評

人工知能

倫理ガイドライン議論進む
理工と人文の共同研究も

大澤博隆（おおさわひろたか）　助教（認知科学）

工学研究科修了、博士（工学）。マサチューセッツ工科大学AgeLab訪問研究員。慶應義塾大学理工学部助教などを経て、2013年より現職。

人工知能分野に3度目の研究ブームが来ており、巷では関連したニュースが溢れている。将棋や囲碁など、既存の指標課題が、新しい手法によって解かれつつあり、人工知能に関わる研究者たちは、不完全情報ゲーム（コミュニケーションゲーム人狼）や創作など、知能を模索するための新たな課題に目を向けつつある。筑波大学でも今年度より人工知能科学センター（CAIR）が立ち上がった。

人間の知能の探求と再現は、人類の夢の一つであり、研究者が研究を進める上で強力な動機になってきた。現在さまざまなシス情系・助教。慶應義塾大学大学院形で使われる情報技術の大半が、人工知能の研究から派生してきたことは、この分野がもたらした功績だろう。

今回のブームは、主にオンライン上のデータに対する機械学習技術の発展やセンサ・ロボット技術の発展による計算機の入出力の増加・多様化が要因であり、企業の動きが中心だ。これに伴い、社会での人工知能の受容性を探るため、従来よりも密な理工・人文研究者の共同企画が始まっている。国内では人工知能学会、海外ではIEEEなどの学術組織が、法や倫理のガイドラインの議論を始めており、国家もその動きに注目している。人工知能の法・倫理というと、擬人化した空想的なイメージが先行しメディアの注目を集めがちだが、現場では意思決定の自動化とその責任、自動生成による創作物の知的所有権問題など、我々の生活に関わる直近の問題が扱われている。こうした倫理ガイドラインについて、関係者は研究開発の足枷というより、研究と社会をつなぎ、標準化を武器に未来社会を推進する道具と捉えている。

私が所属する研究組織AIRでは、科学技術社会論のリーダーを中心に工学者だけではなく、人文系の研究者が集まり未来社会の形の調査・議論を行い、従来のAI・ロボット恐怖論や楽観論を超えた社会を議論し調査している。また人工知能学会では、SF作家と理工・人文の研究者が共同作業を行い、人工知能の存在する未来社会の形を探る企画も行っている。5月10日に刊行された「人工知能の見る夢は」では、学会誌「人工知能」に掲載されたショートショート（短編小説）を学会でテーマごとに再編し、理工・人文の一級の研究者に解説を依頼した。中には人工知能が執筆に関与した小説も掲載されている。

1980年代に発生した、人工知能の第二次ブームに対して、その功罪・影響に関してさまざまな分析や総括が行われた。その中で、ブーム最大の貢献は、人材育成であったことが当事者より指摘されている。私も当時のブームの文献を読んで研究者を志し、間接的な影響を大きく受けて育った。筑波大生には、本質を見極めることを念頭に置きつつ、このブームをうまく利用し自身の専門領域にとらわれずに自分を磨く機会と捉え、大いに活躍してほしい。

反射鏡

再配達どう思う？

インターネット通販の普及で宅配便の取扱量が急増している。一方、不在などで利用者が荷物を受け取れず再配達になるケースも多く、ドライバーの負担や二酸化炭素排出量の増加など大きな社会問題となっている。筑波大学生はこの問題に対してどのように考えているのか。中央図書館や第三エリア周辺などで聞いた。

（前名裕一＝社会学類3年、竹添そら＝知識情報・図書館学類1年）

【国総4年・男性】

この問題が話題になってからは通販を利用していないが、一度再配達を依頼したことがある。最初から配達前に時間指定ができれば再配達をなくせるのではないか。

【目日1年・女性】

不在にしていても荷物を受け取れるようなシステムがあれば再配達はなくせると思う。

【人文2年・男性】

再配達は何度も利用したことがある。再配達が配達業者に負担をかけていることは認識しているが、非常に便利なため個人的には今後も継続してもらいたい。

【メ創2年・女性】

指定した時間よりも早く配達きれ、受け取れなかったことがある。業者としっかり連絡がとれれば再配達を防ぐことができると思う。

【人文1年・男性】

再配達を依頼する人はどうせ再配達してもらえるからと現在のサービスに甘んじているのではないかと思う。

【目日1年・女性】

通販はよく利用するが、再配達を依頼したことはない。利用者も一度受け取れるよう協力するべきだと思う。

【国総2年・女性】

実家暮らしだが、昼間は誰もいないことが多いため不在票が入っていることが多く、申し訳なさを感じている。

【社学1年・男性】

再配達を頼むとドライバーに二度手間をとらせてしまい申し訳なさを感じる。今回の報道で再配達問題が世間に広く知られることになったと思うので、一人ひとりが意識すればいい機会になったと思う。

【教育2年・女性】

通販の定期便を契約しているが、日時指定ができず、一度の配達では受け取れないことがよくある。しかし再配送では時間指定ができ最終的には届くので特に気にしてはいない。

【目日3年・女性】

通販を利用するときは極力コンビニ受け取りをするようにしている。できることなら時間指定して自宅で受け取りたい。

【生資3年・男性】

昼間は家にいないため、どうしても再配達になってしまいドライバーには申し訳ないと感じている。再配達の場合はドライバーに対し残業手当などがでたら再配達に関する問題は解決するのではないか。

【情科1年・男性】

コンビニ受け取りや宅配ボックスを推進することが、配達業者と利用者の双方にとって良いのではないか。

【応理4年・男性】

注文をする際に時間指定ができず再配達を頼んだことがある。小さな物はポストに直接入れられるようにするか、時間指定が必ずできるようにするべきだ。

学生のお財布事情

新学期が始まり、教材費やサークルの新歓などで出費がかさむ。だが大学生の収入は少ない。ベネッセの調査によると、大学生の平均月収は約8万円。一人暮らしの多い筑波大学生は生活費のやりくりを工夫しているに違いない。学生のお財布事情について石の広場や第三エリア前などで聞いた。

（秋田耕平＝社会学類2年、南圭＝教育学類1年）

【国総3年・男性】

4月は新歓やサークルなどで出費がかさむ時期なので、バイトなどをしてやりくりしている。アパートに住んでいることで家賃もかかるため、節約を心掛けた生活をしている。ヨーロッパへの留学を考えているため、そのために貯金もしている。

【化学3年・男性】

親から自立しているため、アルバイトを5つ掛け持ちして生計を立てている。収入は月30万円ほどで、そこから授業料なども払っている。あまり節約などは考えずに生活をしている。

【心理1年・男性】

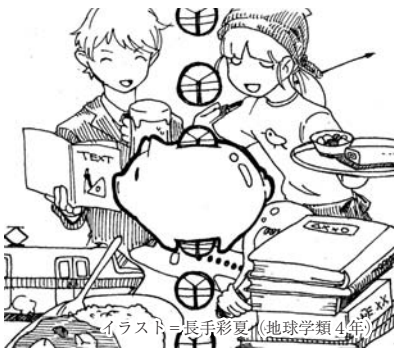
自宅から通学しているが、昼食代は自分持ちなので、毎回300円以内にしている。アルバイトはしていないが、地元で有給の町おこしのインターンをしている。お金がたまった際には漫画を大人買いしたい。

【比文2年・女性】

春に宿舎からアパートへ引っ越しをしたので、その費用が結構かかった。教材費などもかかるため貯金も思うようにできず、やりくりは大変。現在貯金はできていないが、もし貯まったら友人と東南アジアやヨーロッパへ旅行に行きたい。

【応理3年・男性】

自宅から通っているため、生活費はあまりかからない。アルバイトは普段は1つだが、長期休みの時は2つやることもある。バイト代の多くは貯金しており、時間ができれば旅行に行きたいと思っている。4月は教材費がかかるが、高い物は図書館や先輩から借りて節約している。



イラスト＝長手彩夏（地球学類4年）

【社学4年・男性】

アパートに住んでいるため、家賃や生活費がかかる。アルバイトは1年の頃から続けており、主に生活費に充てている。ただ、電気をこまめに消すなど節約を心掛けているため、光熱費はそれほど高くない。節約は、食費などを切り詰めるより、家賃などの固定費を少なくする努力が大事だ。

【心理2年・女性】

アルバイト代は基本的に、全額貯金するようにしている。貯めたお金は、海外への自主研修の費用にする予定だ。留学費用などは思った以上にお金がかかるため、注意すべきだ。

芸術系サークル合同新歓

27団体が多彩な企画行う

芸術系サークル連合会（芸サ連）所属のサークルが新入生に向けてステージ発表やブース企画を行う芸術系サークル合同新歓2017が、4月16日に1C棟と松美上池前で行われた。合同新歓には27団体が参加し、多くの新入生らが来場した。

同イベントは新入生に芸サ連に所属するサークルを知ってもらうことを目的に、毎年4月に開催される。

「OSCA」を披露する「本能寺の変」（4月16日、松美上池前で）

松美上池前の屋外ステージでは9団体が登場した。「E・L・L・（筑波軽音楽協会）」のライブでは、バンド「本能寺の変」が、ロックバンド「東京事変」の曲を演奏した。1曲目の「OSCA」では、ボーカルが拡声器を使用した演出で迫力ある歌声を響かせた。ライブの最後は東京事変の代表曲「群青日和」を披露。高い技術と表現力を生かした演奏で会場を盛り上げた。

THK筑波放送協会は、「もちもちのはっさくラジオ」と題し、ラジオの公開収録のような形でトークを繰り広げた。番組のテーマは「新入生のみなさん大学生活には慣れましたか？」。番組内の企画「悩める子羊専門お悩み相談所」では、新入生のさまざまな悩みに対してアドバイスした。

この際、会場からは「桃太郎になり鬼退治に行こう」などユーモアのある悩みも寄せられ、笑いが起こる場面もあった。

1C棟の4つの教室ではブース企画も行われ、26団体が参加。各団体のブースでは、新入生が担当者から詳しい説明を聞いたり、担当者に質問をするなどにぎわいを見せていた。

終了後、来場した新入生の1人は「2の団体の発表もレベルが高く、さすが大学だと感じた。これからサークルを選ぶ上でのよい参考になる」と話した。また、別の新入生は「今回の催しで大学生活でしたいことが見つけられたと思う」と話していた。

（益本健太、写真も）

息の合ったハーモニー奏でる

アカペラ春ライブ

筑波大学のアカペラサークル「Doo-Wop」の春ライブが4月23日に、5C棟で開催された。サークルの会員で結成された計28組のバンドが出演した。

同ライブは新入生向けに開かれた。アカペラのバンドは通常5、6人で構成され、主旋律を歌う「リード」とその補助となる「コーラス」「リズムをとる「ベース」と「パーカス」から成る。

6人で構成されたバンドの「cheri」は宮崎駿監督のアニメ映画「千と千尋の神隠し」の劇中歌「いのちの名前」を披露。原曲をメンバーがアカペラ用にアレンジした。メッセージ性のあるサビはもちろん、間奏でも息のあったハーモニーで見せ場を作り、観客を引き付けた。リードを担当した新谷佳菜さん（生物3年）は「とても緊張したが、何とか歌い切れてよかった」と話した。

会場を特に沸かせたのはアメリカの5人組アカペラグループPentatonixの曲「Plogle」を歌った5人組のバンド「Galvanix」だ。同サークルは6人のバンドが多い中、「5人でも曲の厚みを出せるように声の出し方などを工夫した」とメンバーの靄場翠士さん（応理3年）。テンポの良さと洋楽ならではのしゃれた雰囲気を余すことなく表現したほか、曲の途中ではアカペラでは珍しいラップも披露し、会場を盛り上げた。

来場した細越野乃花さん（知識図書1年）は「このライブを楽しみにしていた。どのグループもハーモニーがきれいで感動した」と話した。

（佐々木悠里、写真も）

「いのちの名前」を披露した「cheri」のメンバーたち（4月23日、5C棟で）

「3次元のかたち」展

最新の技術に触れる

3次元に関する技術や最新研究に触れることを目的とした企画展「3次元のかたち～作る技術、感じる技術～」がつくば（エキスポセンター（つくば市吾妻）で3月25日から6月11日まで開催されている。

同展は「つくる」「みる」「感じる」のゾーンに分かれており、それぞれのテーマに合った品や体験コーナーが設けられている。

中でも多くの来場者の注目を集めたのは「みる」のコーナーだ。展示品のひとつ「立体折り紙」は同展の監修を行った三谷純教授（シス情系）が開発したシステム「ORIGREVO」で作られた。同システムでは、軸対象な形を包んだ立体的な折り紙を設計できる。複雑な作りをした立体的な折り紙作品は、来場者を惹き付けた。

また、展示されたバーチャルリアリティー（VR）=☞=機器の一種「ヘッドマウントディスプレイ」は、頭に装着することで疑似体験ができる。頭を動かすとそれに合わせて視界が変化し、映像に奥行きを感じることで、実際にジェットコースターに乗っているような浮遊感を感じる仕様になっている。

つくばエキスポセンターでは同展のような企画展を年に約4回行っているという。今回はゴールデンウィークに合わせた開催で、多くの親子連れで会場はにぎわっていた。

宇都宮市から小学3年生の子どもを連れて訪れた女性は、「子どもが理科に興味を持てればいいと思い訪れたが、大人も楽しめた」と話していた。

（鈴木瑞穂＝人文学類2年）

☞バーチャルリアリティー（VR）＝コンピューターで作られた仮想の世界を、実際の感覚を通じて体感する技術及びその世界。現在、家庭用ゲーム機などにも使われている。

「振りコピ」アイドル

爆☆ペデ新歓コンサート

筑波大学アイドル研究会に所属するグループ「爆走☆ペデストリアン」の新歓コンサートが4月21日にIE棟で行われ、約20人が来場した。同グループはアイドルの曲の振り付けを完全に再現する「振りコピ」で舞台に立つ、アイドルが好きな筑波大生7人組だ。同コンサートでは、ぱすぽ☆の「マテリアルGirl」など全8曲の振り付けを真似て踊り、観客を大いに楽しませた。

7曲目に披露した虹のコンキスタドールの「トライアングル・ドリーマー」では、訪れた常連の観客からの大きなかけ声と共に、メンバー同士息の合ったダンスを見せ、盛り上がりは最高潮に達した。

曲と曲の間にはメンバーが交代でMCを披露した。トークでは同グループに入った経緯を振り返ったり、今後の活動に関する意気込みを語った。

同グループの代表を務めるいろはさん（活動名）は「メンバーはアイドルだとは思っていない、アイドルが好きなオタクだ。振りコピをする集団は多くあるが、このような意識で活動しているのはあまりいないので、私たちのようなグループがいることをもっと多くの人に知ってほしい」と語った。同グループは今後、つくば市内だけでなく、都内のフェスに参加するなど活動の幅を広げていく予定だという。

訪れた観客の1人は「一人一人がキラキラしていて〝女の子〟っていいなと思った。今までで一番近い距離で見ることができたので、表情や些細な空気感までもがダイレクトに伝わってきてさらに魅力的に感じた」と話した。（鈴木瑞穂）

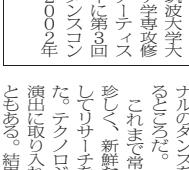
◆おことわり

「絶対音感」は休みます。

原点 GEN-TEN

「体を動かす」そして「問い」

伝統や様式にとらわれない



平山素子（ひらやまもとこ）准教授（コンテンポラリーダンス）

体育系・准教授。筑波大学大学院体育研究科コーチ学専攻修了。モダンダンスのアーティストとして活躍し、99年に第3回世界バレエ&モダンダンスコンクールで金賞受賞。2002年より現職。

幼少から体を動かすことが好きで、近所のバレエ教室に通い始めた。バレエは多彩なダンス文化の中でも詩的でありながら理論的、さらに解剖学的アプローチも進む、伝統的かつ先端をいく芸術である（大学院体育「バレエ」を開講中）。身体を通して実感できる風を切る、どわっと湧く、スピード感のようなさまざまな感覚。それに技術というボディコントロールを加えて確実に実行する面白さに私は引き込まれ、心身を研ぎ澄ました中に現れるダンスという崇高な現象に魅了された。

その後、長きにわたりダンスと向き合う人生を送っていることに私自身が一番驚いている。大学時代に出会った教授の影響もあり、現在はコンテンポラリーダンスという〝同時代性を反映した創作ダンス〟を専門分野にダンサー・振付家として活動している。私の興味の対象は伝統や様式にとらわれることなくオリジナルのダンスを探求できるところだ。

これまで常に新しく、珍しく、新鮮なものを探してリサーチを続けてきた。テクノロジーを舞台演出に取り入れてみたこともある。結果、少々疲れ気味である。アーティストとしてのクオリティを維持することも容易ではないと痛感する日々が押し寄せている。

一方で、筑波大学で講義を担当するようになって「そもそも、なぜ？」を頻繁に使用していることに気づいた。ダンスとは何か？、「なぜ、芸術創造するのか？」など、〝根っこ〟の部分に立ち戻ると、思考が整理されて落ち着く。教えることで気が付かされた私自身に必要な〝学び〟の存在。

「体を動かす」そして「問い」。これらが交錯するループが続くことで私の考えるダンスという現象を生み出されると考えている。シンプルな方法であり「原点」である。

ぶらり俳句 筑波大

躑躅（つつじ）

・そのへんの躑躅みつしりしてゐたる

・いつまでも蟻まはりゐる躑躅かな

・夕つゝじ米零しつゝゆきにけり

撮影地＝平砂地区

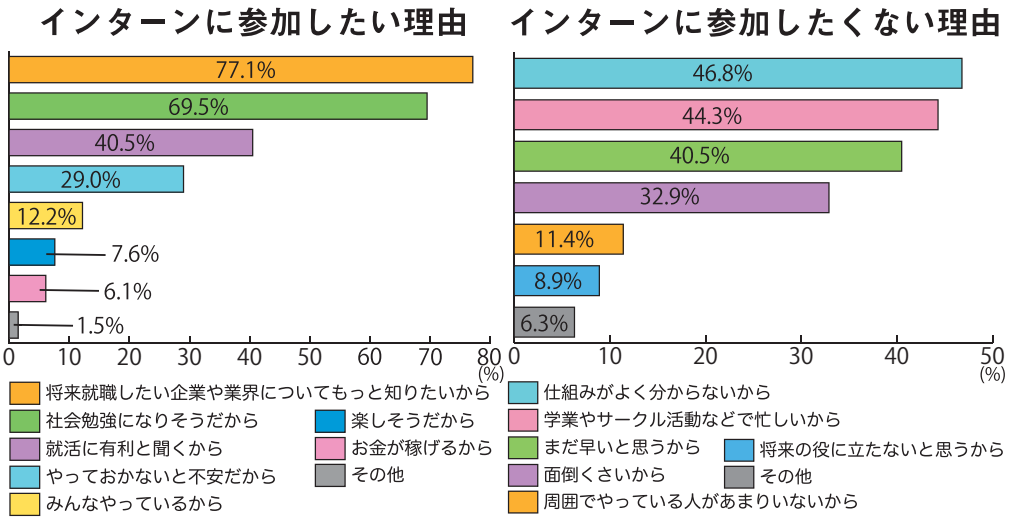
そのへんに咲いている花の名前がよく分からないということは案外多く、興味を持たないかぎりなかなか知ることもないのだが、一度覚えると自分にとってのその季節らしさが増え、なんだかちょっと豊かな気持ちになったりもする。花に疎い人がまず覚えやすいのは春から夏の初めに咲く躑躅。色も大きさもいろいろあるが、とにかくそのへんにあるのが躑躅だ。（堀下翔＝比較文化学類4年、写真も）

筑波大から考えるインターン

文理や希望進路で差

【1面参照】国が学生を対象としたインターンシップ（インターン）に関する指針を定めてから今年で20年を迎える。現在ではキャリア教育の一環として全国の数多くの企業などで実施され、就職活動を見据えて参加する大学生も多い。そこで、筑波大学生はインターンに対してどのような意識を持っているのか。学生228人にアンケート調査を実施したほか、インターンの実態を取材した。

（佐々木悠里、鈴木瑞穂＝人文学類、秋田耕平、石川奏行、岡田優太＝社会学類）



調査結果

今回のアンケート調査では、全国と筑波大のインターン参加率の違いが明らかになった。文科省の調査によると平成26年度にインターンに参加した全国の大学生の割合は20・7％。一方、今回の筑波大生への調査では、2～4年生のインターン参加率は12％で、入学したばかりでインターン参加の機会が少ないと思われる1年生を除いても、全国平均を大きく下回った。

調査では、文系・理系や志望進路別でインターン参加の希望率に大きな差も出た。

インターン参加を希望した学生は文系（人文・文化、社会、国際、人間、体育専門、芸術専門）が70・5％だったのに対し、理系（生命環境、理工、情報）は55・7％。また業後の進路希望別では、民間企業志望者のうち81・6％が参加を希望したのに対し、公務員志望者や、大学院進学希望者はそれぞれ59・1％、56・2％だった。一方で、大学卒業後の進路を「まだ考えていない」と答えた学生のうちインターンへの参加希望者は56・7％だった。

このほか、インターン参加を望む理由を複数回答で聞いたところ、「将来就職したい企業や業界について

◆調査方法

4月26～5月2日に、学群の授業や課外活動団体のミーティングなどでインターンシップに関するアンケートを実施。設問は9項目。計228人から回答を得た。学群別の内訳は、人文・文化学群66人、社会・国際学群30人、人間学群7人、生命環境学群11人、理工学群98人、情報学群12人、体育専門学群2人、芸術専門学群1人、大学院が1人だった。

もっと知りたい」が77・1％だったほか、「社会勉強になりそうだから」が69・5％、「就活に有利と聞くから」が40・5％だった。「みんなやっているから」や「楽しそうだから」の回答はそれぞれ12・9％、7・6％だった。

一方で、インターン参加を希望しない理由を複数回答で聞いたところ「仕組みがよく分からないから」が46・8％、「学業やサークル活動などで忙しいから」が44・3％、「まだ早いと思うから」が40・5％で、「面倒くさいから」も32・9％に上った。

また、大学の就職課を利用したことがある、という回答は5・3％だった。また、利用した目的については、就職活動に関してのカウンセリングや進路相談、インターンの仲介などが挙げられた。

就職課利用率5・3％

就職課

就職活動の一環とされることが多いインターンだが、筑波大就職課とダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンターキャリアサポート部門では、キャリア教育としての意義を重視している。学生が将来への考えを深めることができるからだ。同課の山田麻紀主任によると、インターンは単に企業の業務内容などを知る場でなく、学問と社会とのつながりを考えたり、学生が職業観を考え直す機会になるという。

このため同課・同部門は1、2年生を対象に、大学周辺企業の1週間程度のインターンに参加する総合科目「キャリアデザイン・働く自分―」を開設。受講生は目標をもってインターンに参加し、参加後は自らの活動内容を振り返る。受講生からは「参加後、大学生活のあり方を考えるきっかけになった」などの感想が寄せられているという。

またインターンに関する説明会や、マナー講座なども実施。履歴書の書き方や進路選択の相談なども個別で受け付けている。

同課を訪れる学生の多くは3、4年生。だが同課の秋葉重実課長は「インターンにはさまざまな学びの機会がある。キャリアを考える上で1、2年生にもとても役立つものなので、遠慮せずに積極的に参加してほしい」と語った。

就職課による個別相談の様子＝就職課提供

キャリア教育の一環で

就職後のミスマッチ防ぐ

インターンの現状や今後などについて、大手就活情報サイト「マイナビ」の吉本隆男編集長と、「リクルートキャリア就職みらい研究所」の岡崎仁美所長に話を聞いた。

（聞き手＝佐々木悠里、秋田耕平）

現場の声

■マイナビ

――インターン参加の利点は。

厚生労働省の「新規学卒者の離職状況」によると、平成24年度に大学を卒業した新入社員の約3割が、入社後3年以内に辞めている。企業をよく知らずに入社したことが原因の一つだ。インターン参加の大きな利点は企業を深く知り、企業と学生のミスマッチを減らす点だ。現場を直接見ることで企業や業界への理解が深まり、働くことを考えるきっかけになる。

――インターンの種類は。

さまざまだ。期間も1日から1カ月以上のものまであり、長期のものは現場見学や職場体験など、現場の雰囲気をつかめる内容が多い。短期だと説明会に近いものや、複数の参加者があるグループワークなどが多い傾向にある。企業が直面しうる課題を事前に設定し、それに対し参加者がそれぞれの「役割」を決めて共同で解決に臨むロールプレイング形式なども近年増加している。

マイナビの吉本隆男編集長（4月26日、東京都千代田区のマイナビ本社で）＝佐々木悠里撮影

開催時期でも内容に特徴がある。夏に開催されるものは、比較的長期で現場の雰囲気をつかむことが目的の場合が多い。それ以降は、学生のスケジュールにも考慮し、2～3日間のものが中心だ。

――インターンをどう利用するべきか。

「時間がなくてはけない」という学生の声は確かに多い。だが夏休み中や、短期のものなどを利用すれば学業との両立も可能だろう。志望企業のインターンに申し込むのはもちろんだが、同じ業界の複数の企業のものに参加すれば、企業同士を比較でき、業界をより深く理解できるだろう。

■リクルートキャリア

――インターンの利点と問題点は。

参加は、自分がどんな職業に向くのか、大学での勉強が社会でどう役立つかを考える機会になる。自分の将来を見つめ直し、視野を広げるために有効だ。

インターンの実施割合は業界や企業規模によって差がある。我々の調査では、金融業や建設業では多いが、サービス・情報業や製造業ではゆるい。従業員数5千人以上の大企業では90・5％が実施する一方、従業員数300人未満の中小企業は46・2％ととまる。

――企業から見た筑波大生の印象は。

優秀で魅力的だと見られることが多い。だが首都圏の大学生と比べ、学生の中だけで固まりがちとの指摘もある。それでは経験不足から社会人との対話能力などで差が出てしまい、面接などで不利になる可能性がある。この解決のためにも、インターンはチャンス。ぜひ積極的に参加してほしい。

ぜひ大学近隣（の企業）が行うものにも目を向けて欲しい。「東京の企業に就職したいから、それ以外でやっても意味がない」と考えるのは早計。参加を通じて社会や自分の実力を知ることが大切だ。筑波大は近隣企業と連携し、インターンの紹介を行っている。ぜひ活用してもらいたい。

――インターンに参加する学生への助言は。

インターンが広まったことで、参加すること自体で満足する人も多くなったから社会人との対話能力など、何を学び、何を得るかが重要。目的をきちんと考えた上で参加してほしい。

目的意識を持って参加を

将来を見据えて

実質的な採用活動になる場合も

インターンにはどのようなものがあり、どのように探し、選べば良いのか。また、参加にはどのようなメリットがあるのか。昨年度大学を卒業した先輩2人に経験談を聞いた。

（聞き手＝石川奏子、鈴木瑞穂）

経験者の声

軸を持って選ぶ

新田萌夏さん

そうして参加したインターンを振り返り、新田さんは「会社説明会では聞けない話や、実際に社員から聞くことができた。また彼らと情報交換ができたことでその後の就活に役立てることができた」と語る。

新田さんは、「インターンは実質上、採用活動の場になっている可能性があるとも語る。グループワークなど学生に何らかの課題が与えられる場合は、その結果が後の選考に影響する可能性が高いからだ。インターン先の企業から後日、呼ばれていざその企業に行くと、インターン参加者の一部だけが集められていた、という友人もいたという。

新田さんはインターン参加を通じ、「普段知ることのできない会社の様子を見ることができて、自分の働く姿をイメージできた」と話す。同じ業界を志望する学生と知り合いになり、情報交換ができるようになったのもよかったという。

新田さんはインターンに参加して雰囲気が自分に「合う」と感じた志望企業に内定した。

研究所へインターン

高木亮輔さん

現在、筑波大学大学院に在籍する高木亮輔さん（医科学専攻1年）は大学2、3年生の夏休み、自らの専攻にそった研究所のインターンに参加した。当時、所属していた物学類ではインターンへの参加を呼びかけておらず、参加経験がある同級生もいなかったという。

2年時は、漠然と将来も研究を続けたいと思っていた。そんな時に大学の掲示板で、関西にある研究所のインターンの募集を知り、研究所で働く具体的なイメージを持ちたいと思い、参加を決めた。

5日間の日程だったが、旅費や宿泊費などの経費は全て研究所が負担。研究室訪問や研究者の指導のもとで、当時まだ体験したことがなかった生体マウスの組織を顕微鏡で観察する実験を行った。

3年になると、研究所のイメージを大学院進学前に明確にしたいと思い、再びインターン先を探した。そして、自分の研究に役立ちそうな分子化学の研究所のインターンを見つけ、参加した。

これらのインターンでは、最先端の技術や最新の器具に触れる貴重な体験ができたが高木さんは、最先端の技術だったため、知識不足についていけない部分もあった。事前に予習しておけば、インターンをより有益なものにできただろう」と振り返る。

理系では、大学院進学後に就職する人が多い。このため、大学生の時のインターンが就職に直結することはあまりないが、中には博士課程修了後、過去にインターンに参加した研究所にがなかった例もあるという。短期雇用された例もあるという。

視点

参加して社会を知ろう

今回、インターンに関する筑波大生へのアンケート調査を行って感じたのは、筑波大生のインターンへの関心の低さだった。その原因の一つに、筑波大の立地があると思う。交通費が高く東京を頻繁に訪れるのは難しい。また、学生の多くが大学周辺に住み、ある意味で閉鎖的な環境の中にいる。これらの要因がインターンから筑波大生を遠ざけているのではないか。実際、全国平均に比べ、筑波大生の参加率は低い。

2010年に経産省が行った調査では、企業側が学生に不足していると考えることとして、社会に出るために学生自らが不足していると考えることに大きな差があった。企業側は学生に主体性やコミュニケーション能力が不足していると考え、学生側は語学力やパソコン能力が不足していると考えていたのだ。

このギャップを埋める手段の一つがインターン参加だ。業界や企業が何を考えているかを知れるし、社会的な常識を身につけることもできる。私は1年生の夏休みに、ある地方議員のインターンに参加し敬語の使い方や名刺交換の方法など、社会に出た時最低限必要とされる基本マナーを学ぶことができた。このインターンを通し、さまざまな人とも会うことができ、こうした経験は私の進路希望に大きな影響を及ぼした。

インターンは実施の2～3カ月前から募集が始まるものが多い。また6月以降は、翌年就活に臨む新卒者向けのインターンを紹介する就活情報サイトが開設される。

（石川奏子）

催事

宿舎祭

第43回宿舎祭（やどかり祭）が5月26日（金）－27日（土）に平砂共用棟や平砂テニスコートなどで開催される。26日に前夜祭、27日に本祭が行われる。

「入学から間もない新入生に、祭を通して仲良くなってもらおう」をコンセプトに、学生が独自に作り上げる毎年恒例のイベント。

当日は各団体による縁日のほか、ゆかたコンテストや各団体が制作した御輿のパフォーマンスなどさまざまな企画を予定している。

また宿舎祭当日は、平砂・追越宿舎地区内の道路で終日車両通行止めの交通規制が行われるほか、駐車場の規制も行われる。交通規制図は宿舎祭のホームページに掲載されている。

詳細＝http://www.stb.tsukuba.ac.jp/yadokari/（宿舎祭ホームページ）

問い合わせ＝yadokari2017@gmail.com

HELLO! 先端科学

江面浩教授

受粉不要なトマトを開発

技術の実用化で生産安定へ

さまざまな農作物を生産する上では、昆虫や人の手による受粉の作業が欠かせない。だがこれらを必要としないトマトの研究が江面浩教授（生環系）や徳島大学の刑部敬史教授らの研究チームで行われている。

トマトをはじめ、多くの農作物の生産ではミツバチなど、昆虫の力を借りて受粉することが必要不可欠だ。しかし、昆虫の活動が鈍る夏場や冬場はその受粉が難しく、人工受粉を行う。この際、人の手で多くの花に花粉や成長を促進するホルモンを吹きかければならないが、これは暑いビニールハウス内での作業を強いられるなど農家にとって大きな負担だった。

そこで江面教授らは、果実の大きさや、病気への強さなどに関する遺伝子を構成する塩基の変化に着目。薬品や放射線を用いて塩基の種類を変化させたトマトを数多く作成し、どの遺伝子が果実の大きさなどに影響を与えるかを調べた。

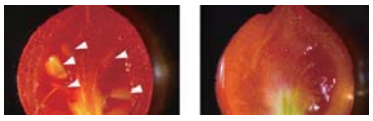
その結果、受粉することで果実を作る働きを持つ「SlIAA9」と呼ばれる遺伝子を構成する塩基が変化すれば、受粉が必要なくなることを発見。これまで同様の品種改良を行おうとした場合、人工受粉などを行って異なる種類のトマトを交配させる必要があり、4～5年ほどを要していた。だが、今回のゲノム編集による方法では交配の必要が無いため、改良に必要な期間が約1年と大幅に短くなった。

この技術が広まると虫や人の手による受粉を行わず、果実を作る農作物を育てることが可能となり、農家の負担の大幅な軽減や、安定した農作物の供給が期待できる。これは生産に必要な人手を減らすことにもつながり、高齢化で農業人口の減少が深刻化している日本の農業にも寄与する。また、今回の技術の応用で、日持ちの良い果実の開発も可能になるという。

研究チームは今後、実用化に向けてこの技術を用いたトマトの本格的な改良を目指すほか、トマト以外でも同様の品種改良を目指した研究を行う予定だ。

江面教授は「受粉を必要としない作物が増えると農家の負担の軽減だけでなく、作物の生産も簡単になり生産量も増える。このため食料問題の解決につながる」と話している。品種改良で生み出された新たな農作物が我々の食を支え、ひいては飢餓を根絶する日が来ることもそう遠くない。

（前名裕一＝社会学類3年）



一般的なトマト（左）と今回開発されたトマト＝刑部教授提供

卒業生からの手紙

アフリカ理解への貢献目指して

筑波大学大学院で東アフリカ遊牧民に関する文化人類学研究を行ったのがきっかけで、私はつくばとアフリカを往復する生活を送ってきた。1998年、北ケニアで2年間の長期調査を始めた時に、当時2人の子供のシングルファーザーであった主人に出会い、そのままケニアで結婚した。今考えると、研究に行き詰っていたのかもしれない。水道、電気、ガスなどないサバンナの果てで、自分が一体何のためにこんな研究をしているのか。大自然に命を捧げる謙虚な人々と生活していると、日本での全てを捨てて貧困や紛争が絶えないケニアで生活してもよいと考えるようになっていた。

調査後、博士論文を執筆するために、主人と帰国した。主人が車の輸出会社を設立することになり、私は、研究とビジネスを同時に手掛けるようになった。研究面では日本学術振興会の研究員になり、私と主人の輸出業も急成長した。ところが、妊娠していることに気づき、人生の大きな賭けに直面した。博士課程で31歳の女子学生が、研究、ビジネス、家庭を両立できるのか。貪欲で恐れを知らない私は、全てを同時並行させた。ケニアに置き去りにした2人の子供も日本に連れてくることにした。博士論文を執筆し終えた頃、技官として筑波大に就職し、研究を続けることになった。その間、2人目の子供を出産することになり、技官の任期を終えた頃には疲れ果てていた。

そこで車のビジネスを行うべく、2006年に家族でケニアに移住することになった。滞在1年後、首都ナイロビの一等地でショールームを構えたが、大統領選挙前後の暴動に耐え兼ね、子供を連れて日本に帰国した。車のビジネスに加え、重機のリースやダムの請負建設を行ったが、詐欺師や同業者による営業妨害のためケニアでビジネスを継続することが困難に。日本で生活するためにアフリカンレストランを経営することにした。

レストランは、筑波大近くのテクノパーク桜の古民家を改造し、店名はアフリカの家庭料理である「シダモ」と名付けた。「シダモ」は、主人の祖父の出身地であるエチオピア南部の地方の名前で、コーヒーの産地でもある。アフリカの一般家庭で出てくる料理を提供することで、アフリカ理解に貢献することを目指している。

人生は長いようで短い。必死で生き抜いてきたら、知らないうちに時間が流れている。学生時代から何も変わっていないかのようにみえて、何度も困難を乗り越えてきた。若い学生の皆さん、将来を恐れることなく、自分の直観を信じて、いろんなことに挑戦してください。（平成7年度地域研究科修士課程修了）

つくばでアフリカ料理店を営む

菊川 水際（みぎわ）さん

桜美林大に逆転勝利

8回一挙に4点入れる

野球　首都大学春季リーグ

8回裏、1点を返す左前適時打を放つ川端（4月29日、桜美林大戦で）

【牛久運動公園野球場（茨城県牛久市）で前名裕一＝社会学類3年、写真も】6大学が優勝を争う首都大学春季1部リーグ戦が4月1日から行われている。昨年の秋季リーグで5位に終わった筑波大は6勝4敗で3位につけている（5月11日現在）。

29日に昨年の秋季リーグ王者の桜美林大と対戦。7回まで無得点に抑えられたが、8回の連続得点で逆転し、4−3で勝利した。

序盤は桜美林大の強力打線に苦しめられた。初回、先発の大場遼太郎（体専4年）が中前安打と左翼線に二塁打を浴び先制された。その後は一旦持ち直したが、5回に連続安打と四球で満塁とされ、押し出し四球などで2点を奪われた。

打線は相手の緩急をつけた投球を前に、7回まで2安打と沈黙。桜美林大の堅い守りにも阻まれ、大場を援護できなかった。

だが試合は8回に急転。代打・福永大貴（同3年）や星貴裕（同3年）の安打などで1死満塁とすると、川端将広（同4年）が左方向に適時打を放ち、1点を返した。また相手投手の制球が乱れ、続く打者2人が連続で四球を選び同点に追いついた。さらに種子島大輝（同3年）が犠牲フライを放ち、この回で一気に計4点を追加し勝ち越した。

8回以降は村木文哉（同1年）と加藤三範（同1年）が、一時は走者を三塁まで進めるなどピンチを招くも、無失点に抑え逃げ切った。

川村卓監督（体育系・准教授）は「打線は不調だったが、8回に代打で出場した福永が流れを作ったおかげで勝利できた。今後も打線をつなげることを意識したい」と話した。

観戦記　新人2人が好投

8回裏、相手投手のミスを機に打線が一気につながり勝利をつかみ取った。この劇的な逆転の裏には2人の新人投手の活躍があった。

村木文哉（体専1年）は7回、1、2塁に走者を背負い追加点を奪われるピンチに登板。球速150㌔近くのストレートで、この回を無失点に抑えた。

また、9回途中の2死3塁の窮地にマウンドを託されたのは加藤三範（同1年）。同点に追いつかれる重圧の中、強気の投球で三振に抑え、窮地を救った。

自身の活躍を村木・加藤ともに「先輩の支えのおかげ」と口をそろえる。

村木は「チームに勢いをつけたいと思い登板した。先輩からの『力まずに自分の投球をするように』という助言も力になった」と振り返った。加藤も「打たれても先輩が捕ってくれると信じていた。捕手の島実沙樹さん（同3年）の好リードにも助けられた。先輩に感謝している」と話した。

11日現在で6勝4敗と、春季リーグ戦での優勝は絶望的だ。だが、新人の台頭など今後の活躍には注目が集まる。2006年秋を最後に10年以上リーグ優勝から遠ざかっている筑波大。今年こそ、リーグ優勝、そして明治神宮野球大会出場権に期待したい。（前名裕一）

相手打線を無失点に抑える好投を見せた村木（4月29日、桜美林大戦で）

好調維持し2位

ハンド

【東京女子体育大学体育館（東京都国立市）で、佐々木悠里＝人文学類3年、豊岡恵＝比較文化学類1年】8大学が争う関東学生1部春季リーグ戦が4月15日から5月21日まで行われている。筑波大は4勝1敗1分で2位（5月11日現在）につけている。

女子は4月29日に早稲田大と対戦。試合は互いの好守で拮抗した展開となったが、後半に得点を重ねた筑波大が20−16で接戦を制した。

筑波大は前半、青麗子（体専2年）や高木紗加（同1年）らが何度も速攻に持ち込みシュートを打ったが、早稲田大の堅い守りを前に思うように得点を重ねられなかった。青は「普段通りにシュートできず、決めきれなかった」と話した。一方、早稲田大の攻撃に対してはキーパー中村千穂（同2年）の好セーブや連携の取れたディフェンスで簡単にはシュートを決めさせず、7−8で前半を終えた。

後半に入ると、筑波大は青の連続得点を皮切りに主導権を握り、一時は6点差をつけた。終盤、早稲田大の猛攻を受けたが、20−16で逃げ切った。

高木は「常にゴールを狙うプレーが後半の得点につながった」と話した。

3人がユニバ代表に　日本選手権

水泳

日本選手権が4月13−16日に日本ガイシアリーナ（名古屋市南区）で行われ、女子50㍍自由形で岡野圭穂（体専3年）が25秒69秒で、女子100㍍バタフライで平山友貴奈（同4年）が59秒23でそれぞれ5位に入賞した。また、男子200㍍平泳ぎでは大久保琳太郎（同3年）が2分11秒08で6位に入賞した。

大会後、岡野、平山、大久保の3人は8月に台湾で行われるユニバーシアードの日本代表に選出された。代表に3人が選出されるのは14年ぶり。（徳永翼）

関東大学選手権

圧巻の2連覇達成

堅いディフェンスからの速攻でゴールを狙う波多（5月7日、白鴎大戦で）

【国立代々木競技場第二体育館（東京都渋谷区）で益本健太＝人文学類2年、写真も】関東大学選手権が4月22日から5月7日まで行われ、筑波大は7日の決勝で、白鴎大に115−57で圧勝し2連覇を果たした。昨年、関東大学選手権、関東大学リーグ戦、全日本大学選手権を制し3冠を達成した筑波大は、今年は関東大学新人戦を含む4冠を目指しており、目標達成に向け幸先の良いスタートを切った。最優秀選手賞には馬場雄大（体専4年）、優秀選手賞には杉浦佑成（同4年）と増田啓介（同2年）が選ばれた。

4冠目指し好発進

バスケ

6日の準決勝で日本体育大に104−57と快勝し、順当に勝ちあがった筑波大は決勝で白鴎大と対戦。白鴎大は昨年準優勝の拓殖大や昨年3位の東海大を破り勢いに乗っていたが、筑波大は持ち味の堅いディフェンスからの速攻や馬場や増田らの個人技などで圧倒的な力の差を見せつけ、試合を制した。

筑波大は序盤、波多智也（同3年）の連続得点や玉木祥護（同3年）のダンクシュートなどで流れをつかむと、続けて馬場や主将の青木保憲（同4年）らも得点し、7点のリードを得た。第2ピリオドでは、得点を量産。特に、増田は精度の高いシュートでこのピリオドだけで14得点を重ね21点。「得点を取るという自分の仕事ができた」と振り返る増田の活躍で完全に主導権を握った筑波大は、48−28と20点差をつけて前半を終えた。

後半に入っても筑波大の勢いは止まらなかった。第3ピリオドでは、白鴎大の得点を6点に抑えた一方、増田や牧隼利（同2年）らが中心に速攻を重ね一挙に32得点を挙げた。

点差を50点近くまで広げて第4ピリオドに入ると、吉田健司監督（体育系・准教授）は次々と選手を交代。森下魁（同2年）が205㌢の長身を活かしてゴール下で確実にシュートを決めるなど交代選手もテンポよく得点し、最後まで筑波大のペースで試合を進め、115−57と大差をつけ勝利した。

主将の青木は、「今年の目標の4冠達成に向け、まず最初の関東大学選手権優勝できてうれしい。次の新人戦では増田や牧ら下級生の活躍に期待したい」と話した。

吉田監督は、「ディフェンスから速攻に持ち込む自分たちらしい試合運びを展開できたことが優勝につながった。今後も戦力の底上げに取り組んでいきたい」と話した。

強敵中央大破る　チーム力で勝利

バレー

春季関東大学リーグ

【流山市民総合体育館（千葉県流山市）で越智小夏＝比較文化学類2年、写真も】12大学が争う春季関東大学男子1部リーグが4月8日から開催されている。筑波大は6勝2敗で、3位につけている（5月11日現在）。

4月29日には昨年の大学選手権王者の中央大をチームプレーで制し、3−1で勝利した。

第1セットは序盤から中央大のミスに乗じて流れをつかんだ。中盤以降は中央大のダブルエース、石川祐希（4年）と武智洸史（4年）が奮闘し競り合う展開になったが、吉田綜貴（体専2年）の連続得点を皮切りに、一気に差を付け24−18に。24点以降、筑波大のミスが続き最後の一点が決めきれずにいたが、2回のタイムアウトの後、小池勇輝（同4年）の鋭いスパイクでセットを先取した。

力強いスパイクを打ち込む吉田（4月29日、中央大戦で）

第2セットは、中央大のレシーブやサーブに阻まれ得点を決められず、終盤追い上げるも、23−25でこのセットを落とした。

だが第3セットではセッター中根聡太（同4年）の速いトス回しや、秦耕介（同4年）の強烈なバックアタックで中央大のブロックを翻弄し、序盤から得点を量産。また、サーブで相手のエースを狙い、流れに乗せなかった。中盤以降も粘り強いレシーブでラリーを制し、25−19でセットを奪うと、第4セットも連携のとれたプレーで相手を圧倒し25−19で勝利した。

ここまで無敗だった中央大に初黒星を与えた筑波大。副主将の秦は「試合間の一週間で、何度もレシーブのフォーメーションの確認や早い攻撃の練習をした」と勝因を話した。

秋山央監督（体育系・助教）は「ミーティングを重ね戦術を立てるなど、4年生がチームを一つにまとめたのが勝利につながった」と話した。

関東春季リーグ
女子 5季連覇果たす

【日本体育大学健志台キャンパス（横浜市青葉区）で吉永真理＝生物学類2年、写真も】6大学が争う関東大学春季リーグが4月29日から5月5日に行われた。女子は1部優勝を果たし、春、秋通してリーグ5季連覇を果たした。男子は2部で優勝し、7日に行われた入れ替え戦では明治大との対戦に3―1で勝利し1部昇格を果たした。また、リーグ初出場の香山未帆（体専1年）がMVPと新人賞に、馬場澄生（同4年）がMVPに選ばれた。

第1ダブルスで粘り強く戦う柏原（左）と加藤（5月5日、早稲田大戦で）

バドミントン

女子は4月29日の日本体育大との対戦を2―3で落としたが、続く3戦を勝ち抜き、5月5日の最終戦では早稲田大と対戦し3―2で勝利。4勝1敗で勝ち点は法政大と並ぶが、取得マッチ数で法政大をTポイント上回り優勝を掴んだ。

第1シングルスで安田美香（同2年）が0―2で落とすも、第2シングルスではリーグ初出場の香山が堂々としたプレーで2―0で勝利。

続く第1ダブルスには加藤美幸（同4年）・柏原みき（同4年）ペアが出場。第1ゲームを21―14で取るが、第2ゲームは「左利きの相手が打ちやすい球を多く出してしまった」（柏原）ため15―21で落とした。そして最終ゲームでは、ショットを打ち込む場所を工夫することで左利きの相手にも対応し、2―1で勝負を制した。柏原は「自分たちがチームの柱であるという自覚を強く持ち、粘り強く戦った」と話した。

その後の第2ダブルスでは安田・香山ペアが0―2で敗北。勝負の行方は第3シングルスのエース、加藤助教）に託された。長いラリーが続くも、加藤の鋭いスマッシュと気迫で流れを掴んだ。相手のミスも重なり2―1で勝利を決めた。加藤は「一本一本に集中して思い切った試合ができた」と話した。

吹田真士監督（体育系・准教授）は「サーブで試合を優位に持っていくことにこだわった。ただ、相手も対応してくるため今後も進化し続ける必要がある」と話した。

女子 3年ぶりの優勝
関東学生選手権春季トーナメント

団体戦決勝で「皆中」を決め優勝を果たした斎藤（5月5日、東京武道館で）

弓道

【東京武道館（東京都足立区）で秋田耕平＝社会学類2年、写真も。12面に関連写真】38大学が争う関東学生選手権春季トーナメント決勝大会が5月5日に行われ、筑波大は団体戦で女子は優勝、男子は準優勝した。女子は3年ぶり7度目の優勝、男子は5年ぶりの準優勝となった。また個人戦では女子の斎藤詩乃（体専4年）が準優勝、男子の竹内匠（社学2年）が3位となった。

男子は準優勝

■女子

団体戦は1位で進出戦を通過。決勝トーナメント1回戦、準決勝ともに接戦を制し勝ち進んだ。

決勝では昨年準優勝の大東文化大と対戦。斎藤が4本全てを的に命中させる「皆中」を決めるなど、3人合計で12射8中させ優勝を果たした。斎藤は「昨日の練習まで調子が悪かったが、気持ちを切り替えて、団体での優勝のため最上級生として的中したいと思っていた」と話した。

個人戦では決勝で斎藤が8射7中させ、予選の結果と合わせ準優勝した。

■男子

決勝トーナメント1回戦は接戦（勝ち進んだが、準決勝の早都宮大戦では20射14中と同中になり、延長戦となる2回競射に突入。これも10射9中と同中になり、再延長戦の1回競射で筑波大は5人全員が的中させ勝負を制した。

迎えた決勝では、大会5連覇中の大東文化大と対戦。川畑竣哉（体専2年）が皆中を見せるなど奮闘したが、5人合計20射15中と大東文化大の18中に及ばず準優勝に終わった。主将の阿部哲哉（同3年）は「優勝できず悔しい。相手の勢いに押され、自分たちの流れがつかめなくなる欠点が出てしまった」と話した。

個人戦では竹内が8射7中させ、順位決定戦である「線的選近競射」で3位につけた。

松尾牧郎監督（体育系・准教授）は「男女とも好成績で良かったが、特に男子で試合の立ち上がりでのミスなど、日頃の練習での課題が出てしまった。だが選手の状態は昨年の同時期よりも良いので、次のインカレや全関東大会へ向け良い大事な試合となった」と話した。

津金が初優勝
63キロ級同門対決 能智を制す

柔道

全日本選抜体重別選手権

全日本選抜体重別選手権大会が、4月1、2日に福岡国際センター（福岡市博多区）で行われ、女子63キロ級で津金恵（体専4年）が優勝、能智由衣美（同4年）が準優勝に輝いた。また、8月に行われる世界選手権大会の団体戦代表に津金と能智が選出された。

前回覇者の能智は、準決勝で佐藤史織（山梨学院大3年）と対戦。序盤から積極的に足技を仕掛けた。約3分40秒、支釣込足で一本を勝ち取った。

前回準優勝の津金は、準決勝で発木穂乃佳（兵庫県警）と対戦。試合は接戦となり、延長戦にもつれ込むも、約1分20秒で大外刈りを決め、一本勝ちとなった。

決勝は、能智対津金という2年連続での筑波大の同門対決となった。「同門対決であることを意識せず、ただ勝ちを狙いに行った」（津金）

互いに技を決めきれない激戦の中、勝敗を分けたのは指導の数だった。津金は序盤から積極的に能智に足技をかけるなど攻める姿勢を見せるものの、技を決めきれなかった。開始約1分で能智が指導を取られると、その後、双方やや消極的に。だが、残り約2分半で両者ともに指導を取られると、再び双方の技の掛け合いとなる積極的な姿勢をみせた。組み手を争ったり技をかけあうものの決まらず、勝負は延長戦にもつれ込んだ。そして延長5分45秒で、能智が3回目の指導を受け反則負けとなり、勝敗が決まった。

津金は、「全国レベルでは、技を決めることは困難。技だけではなく、攻め方や指導を意識した練習が勝ちにつながった。シニアで初優勝を飾れて非常にうれしい。今後も国内の大会で優勝を狙いつつ、8月の世界選手権大会での勝利に貢献したい」と語った。

（加藤未悠＝社会学類3年）

ラグビー

大勝するも課題残る
関東学生春季大会

【ニッパツ三ツ沢公園球技場（横浜市神奈川区）で佐々木悠里＝人文学類3年、12面に関連写真】6大学で争う関東大学春季大会が4月23日から6月18日まで行われている。Bグループの筑波大は4月30日に青山学院大と対戦し、50―10で勝利した。

前半開始直後から、筑波大は積極的な攻撃で主導権を握った。3分にゴールライン付近でのスクラムから杉山優平（体専2年）がトライし、先制。前半8分には青山学院大ディフェンスの隙間を抜かれ独走を許しトライを決められたが、その後は鈴木啓太（同4年）らが個人技でトライを量産し、36―5で前半を終えた。

後半に入っても、筑波大は着実に点を重ねたが、守りでは甘さが目立った。青山学院大のグラウンドを広く使う攻撃に対応できず、後半20分の鈴木のトライを最後にボールを奪えない展開が続いた。試合は50―10とスコア的には大勝したが、亀山雄大（同4年）は相手をタックルで捕まえきれなかった」と悔やんだ。筑波大の強みである1対1で相手に抜かれないディフェンスで、課題が残る試合となった。

古川拓生監督（体育系・准教授）は「ディフェンスなど一つひとつのプレーの精度を高めたい」と話した。

顔

憧れのプロチームで成長

インカレベストゴールキーパー

阿部航斗（体専2年）

昨年12月、全日本大学選手権大会（インカレ）で優勝を成し遂げた筑波大学蹴球部。決勝での8得点は記憶に新しいが、強みはその爆発的な得点力だけではない。インカレ全4試合を1失点で抑えた守備力もその一つ。その守備の最後の砦としてゴールを守りきった。実力が認められ、大会のベストゴールキーパーに選出された。

もともと体を動かすことが好きで、幼少期からさまざまなスポーツを経験した。そんな中、地元新潟のプロチーム、アルビレックス新潟の試合を両親と観戦してから、サッカー選手に強い憧れを抱くように。小学1年から地元サッカークラブで、当初はフィールドプレーヤーとして多くのポジションを経験した。

転機が訪れたのは中学1年の時。憧れのアルビレックス新潟のジュニアユースのセレクションを受けた。結果は落選だったが、長身や体の使い方などを見込まれ、ゴールキーパーへの転向を条件に入団を勧められた。

「フィールドプレーヤーでの入団が目標だったので悔しい思いはあった」。だが、プロチームの下部組織という好環境、何より自分が憧れたチームで成長したいとゴールキーパーへの転向を決めた。

プロクラブの質の高い指導のもと、みるみる頭角を表した。当時からすでに180㌢あった長身を生かしたプレーで活躍した。また、フィールドプレーヤーとしての経験も役立った。「相手がシュートを打ちにくい間合いに入ったり、ボールを操る技術などはこれまでの経験があったから」

高校1年にはU―17日本代表にも選出された。「日の丸を背負って戦った経験のおかげで、大舞台でも緊張しないようになった」

プロからの誘いもあったが、大学で4年間技術を磨いてから、プロで即戦力になりたいという思いで進学を決意。「一つ一つの練習に懸ける思いの強さや選手同士の競争心の高さに惹かれ、筑波大を選んだ」

入学後すぐにベンチ入りを果たすものの、出場機会には恵まれなかった。「サッカーは試合に出てなんぼ。出場できず悔しかった」と振り返る。

その中で、8月に行われた天皇杯茨城県予選決勝の流通経済大戦で出場。その試合を無失点で抑え、プロと戦う本戦の出場につなげた。本戦では敗戦を喫したが「プロとの力の差を感じたが、今の実力を冷静に確認できた」と振り返る。

数少ないチャンスをものにし、後期リーグ戦ではスタメンに定着。好セーブを連発し、筑波大のリーグ最少失点の立役者となった。迎えたインカレでは全試合に出場し、チームの13年ぶりの優勝に大きく貢献した。

「自分は守りの選手なので、勝利だけではなく無失点で試合を終えることも大事。今後も自分のベストを出し続けたい」。「古豪」筑波復活の立役者となった守護神は、さらなる飛躍を誓い、今日山瑛生＝社会学類3年、写真は本人提供）も

グローバルヴィレッジ運用1カ月

「留学生と交流できていない」

宿舎を問う

4月から留学生と日本人学生が同居するシェアハウス型の宿舎「グローバルヴィレッジ」の運用が開始され、1カ月が経過した。現状を探った。

同宿舎の最大の特徴は「留学生と日本人学生の混住」。しかし、4月から運用を開始した全310室には日本人学生213人に対し、留学生が42人しかおらず、5人1組のユニット内が日本人学生だけのユニットも存在する。同宿舎に住む韓国人留学生は「日本人学生の知り合いを増やしたくて入居した。同じユニットの入居者と一緒に買い物に出掛けたりテレビを観ることは楽しいが、ユニット内には自分しか留学生がおらず、他の国の留学生と思ったように交流ができていない」と話すなど、学生からは現状に対する不満の声も多い。

学生生活課の担当者は「春入学の留学生は少ないため4月から入居する留学生が少なくなってしまった。秋入学の留学生が入居することで、留学生の比率は今後上がる予定だ。留学生を優先して入居させるとして徐々に留学生の比率を増やしていきたい」と話す。

しかし、仮に秋入学の学用に確保している空室全てに留学生が入ったとしても、日本人学生と留学生の比率はおよそ2対1。建設当初に大学が目標としていた2対3には程遠い。

そのような中、入居者の中で他のユニットに住む学生と交流をしようとする動きも出ている。ある男子学生は「ランドリールームで入居者に話しかけて友人を増やしている」と話し、別の男子学生は「共用施設であるコミュニティーステーションのキッチンを使って留学生から料理を教えもらう会を開くなど、入居者同士が交流できる場を作りたい」と語る。管理事務所などが入るコミュニティーステーションにはキッチンや和室などがあるため、使い方次第で活発な交流が望めそうだ。

不満の声もある一方で、入居者からはこれまでの宿舎と異なるシェアハウスの利点を評価する声もある。昨年度一の矢宿舎に住んでいたという女子学生は「風呂に入る時間に気を遣わなければならない点もあるが、シェアハウスだと、家に帰ると話し相手がいるので安心する」と発言。「グローバルヴィレッジでの共同生活に満足している」と話した。

ただ、ユニットごとに学生同士の交流の度合いにはばらつきがある。一部のユニットの学生からは「自室でレポートの作成をしたり、サークルや研究が忙しいため共用のリビングをあまり使っていない」といった声も上がっている。

今月からは入居者がコミュニティーステーションを使いパーティーなどのイベントなどを開催できるようになる。学生だけでなく、大学側なども含めた異文化交流の場が作られることを期待したい。（南圭＝教育学類1年、徳永翼）

宿舎の共用リビング（3月27日、グローバルヴィレッジで）＝越智小夏撮影

一の矢・平砂地区で

移動スーパー運用始まる

日用品や生鮮食品を販売する移動スーパー（4月29日、グローバルヴィレッジで）

移動販売車で日用品や生鮮食品などを販売する「移動スーパー」の運行が4月15日から学内で始まった。カスミ万博記念公園駅前店（つくば市島名）が運営し、土曜日の昼頃に一の矢宿舎と平砂地区のグローバルヴィレッジで野菜や刺し身、冷凍食品など約400種類の商品を販売する。通常店舗と同価格であるほか、利用者からの要望で商品の追加も行う。また注文した品は翌週に受け取ることができる。

営業初日には100人以上が訪れたが、2回目の22日以降の来客は50名ほど。店員は「家族連れの留学生度利用者がいないと成り立たないのでぜひ来てほしい」と話していた。店員によると「多くの商品を置くことができない分、特売商品を中心に品物をそろえている」という。

学生生活課の担当者は「平日は学生が授業に出ているため、土曜日のみの運用となった。学生宿舎の周辺にはスーパーが少ないため、歩いて買い物ができるようになり、学生は便利になるだろうと話している。また、一の矢宿舎に住むある学生は「スーパーが遠いので手軽に食材が買えて助かる。特に卵が安かったのでうれしかった」と話していた。

「移動スーパー」の営業時間は一の矢宿舎36号棟駐車場が11時から12時、グローバルヴィレッジA棟横は12時10分から13時10分。土曜日が祝日の場合には休みになる場合もあるが、夏休みなどは、営業を行うという。（徳永翼、写真も）

掲示板ウェブへ一本化

学生の声受け改善へ

3月までは多数あった掲示が外され、がらんとした掲示板（5月7日、1C棟で）＝鈴木瑞穂撮影

筑波大学は4月から各エリアの支援室などが設けていた掲示板への紙による掲示を原則やめ、ウェブ掲示板「TIPS」に一本化した。これにより休講情報や集中授業の案内など、ほとんどの掲示がウェブ掲示板でのみの閲覧になった。一方、学外からのポスターなど電子化が難しいものは、従来通り紙での掲示を続ける。ウェブ掲示板は、学生からの要望を受け、昨年7月から試験運用していた。

ウェブ掲示板は履修や成績を管理するシステム「TWINS」と連携しており、それぞれの学生が履修登録した授業に合わせ、休講や補講の情報などが表示される。

自宅から通学する女子学生は「通学途中や自宅からも休講情報などが確認できて、便利になった」と話す一方、別の男子学生からは「ウェブでの掲示は見出しが統一されておらず、必要な情報を探し出すことが紙の掲示より難しい」と話す。

教育推進課の加倉井厚夫課長は「学生からの意見を踏まえ、掲示方法の改善などを進めていく」と語り、5月中に関係する事務担当者により、問題点の把握や掲示方法などの確認を行う予定。（秋田耕平）

アンダーアーマー大学会館に開店

筑波大学の大学会館別館ホールに、国内では初となるスポーツブランドの専門店、「アンダーアーマーポップアップストア筑波大学」が4月19日に開店した。筑波大は米国のスポーツブランド「アンダーアーマー」の日本総販売代理店・ドーム（東京都江東区）と連動部のユニフォームの刷新や、スポーツを通じた大学運営の強化などを目的に、昨年11月、協定を締結。新調されたスポーツエンブレムを使用した衣類などを同店で販売することとなった。

同店は、7月までは仮設店舗として同ホール内で営業。店内にはポロシャツやパーカーなど常時30点を超える多くの商品が並び、筑波大生と教職員は学生証や職員証を提示すれば、特別価格で購入できる。

開店初日となった4月19日には、オープンと同時に多くの学生が詰めかけた。

アンダーシャツを購入した坂本龍さん（体専2年）は「ここでしか買えない大学のスポーツエンブレムの入った商品が買えて良かった」と話し、店員の加藤利奈さんは「スポーツエンブレムの入った商品を多くの学生に身に着けてもらって、スポーツを盛り上げていきたい」と話した。（佐々木悠里、12面に関連写真）

世界からの教室

マラウイ　大林格（いたる）

マラウイに卓球教室を

現在、私はマラウイ共和国の北部にある小さな村にいます。大学1、2年の夏に続き、3度目のマラウイ渡航です。この村でのボランティア活動を目的として、大学を1年休学して、今回のマラウイ渡航を決めました。

村での生活は、井戸での水汲みから一日が始まります。自分たちの食事のために、生きた鶏やヤギの屠畜と解体で、命をいただくということを身体で覚えます。汲んできただけの水しか使えないことで水の大切さを学びます。夜は満天の星空の下で歯磨きとトイレを済まし一日を終える。そうした単調な生活を繰り返しながらも、日本では得ることのできない貴重な経験をしています。ボランティアとして滞在している私ですが、多くの学びや気づきの恩恵を受けているのは、実は私のほうなのかもしれません。マラウイとそこに住む人々に感謝しています。

私が活動する村の人々は、チトゥンブカという言語を話します。マラウイはアフリカ大陸南東部に位置します。テレビなどでは、世界最貧国というフィルターを通して語られることの多い国です。確かに、平均寿命や妊産婦死亡率、一人当たりの国民所得などいずれも世界最低レベルであることは事実です。そうした背景を持つ国に良い印象を抱く方はきっと少ないと思います。それでも、マラウイは〝The Warm Heart of Africa〟と呼ばれるほど温かな国民性で有名で、私もマラウイが抱える課題に直面する反面、そうした人々の温かさも日々感じています。

私が活動する村の人々は、チトゥンブカという言語を話します。マラウイは何のためになるのか、偽善ではないのか、と聞かれることがよくあります。正直、私は心の底から確信をもってその質問に答えることができません。まだまだ未熟で、自分がしていることが本当に正しいことなのか、自問自答を繰り返す日々です。隣の村ではハシ最近、3歳の子供が亡くなりました。死因はマラリアと栄養失調。その中で、なぜ自分が「卓球」を通じた国際交流活動を中心に選ぶのか、現地に来てからより一層わからなくなりました。自分でも簡単に見つかるような答えではないと思いますが、今はここでしかできない「人」と「環境」から多くを学び、行動したいと思います。

このマラウイでの活動のための休学の1年間が学生生活の有意義な足踏みとなるよう、私は、常に等身大の素直な自分でマラウイとその人々に向き合い、多角的な視野で多くを学び、自分らしく生きていきたいと考えています。（国総3年）

よみがえった国際大会

部員たち資金集めに奔走

テニス MEIKEIオープン

資金難から継続が危ぶまれていたテニスの国際大会「筑波大学国際テニストーナメント」を、筑波大学硬式庭球部の部員らがよみがえらせた。大会は2015年まで5年間続いたが、開催資金の不足から継続が困難に。このため部員らは企業に訴えるなどして支援金集めに奔走し、この結果、大会は「筑波大学MEIKEIオープン」と名を変えて続いている。部員らは「来年以降も開催していきたい」と意気込んでいる。

PR活動の一つとして開催した仁木拓人選手（右）の講習会（4月2日、体芸テニスコートで）＝硬式庭球部提供

「筑波大学国際テニストーナメント」は「フューチャーズ」と呼ばれる国際テニス連盟が認めた若手選手向けの国際大会だった。だが、2015年に開催資金の確保が困難に。しかし国内で行われる「フューチャーズ」は同大会を除くと6つと少ないため、硬式庭球部員らが「大会資金の調達も含め、大会全体の運営を自分たちで行う」と立ち上がった。

大会開催に必要な運営資金は、広告費や賞金など最低でも450万円。そこで部員らは直接企業に出向いて大会の趣旨などを説明するなど支援を訴えた。この結果、昨年は700万円を集め、第1回の「MEIKEIオープン」開催を実現した。

また、2回目の今年は約100の企業から360万円を超える支援があったほか、ネット上で資金を募るクラウドファンディングも活用。目標額30万円を上回る約40万円が集まった。今年の大会期間中には、つくば市出身の仁木拓人選手（三菱電機）の講習会や、高校生向けの練習会なども開催。LINEスタンプも作成するなどPR活動にも力を入れた。

今年の「MEIKEIオープン」は3月25日から4月2日まで体芸テニスコートで行われ、プロの高橋悠介選手（フリー）が優勝。庭球部からは廣田大輝（体専3年）ら4選手が出場したが、予選敗退だった。

だが、今年の同大会実行委員副リーダーを務めた伊藤寛太さん（体専3年）は「このような国際大会を自分の大学で開催することは貴重な経験だ」と大きな達成感を感じている。

一方、硬式庭球部監督の三橋大輔監督（体育系・准教授）は「学生たちに運営を全て任せたことで、過去にはない『学生目線』の大会となり、参加選手や観客からも好評だった。運営に携わった学生の中から日本のテニス界に貢献する人材が生まれることを期待している」と発言。選手らの「快挙」を手放しで褒めたたえた。

（岡田優太）

科学の魅力や最新研究を紹介

キッズ・ユニバーシティ 特別授業なども

子どもたちに科学の魅力や最新の研究を紹介するイベント「筑波大学科学技術週間キッズ・ユニバーシティ」が4月22日に行われた。筑波大学の各所で2つの特別授業を含む18の企画が開催され、多くの小中高生でにぎわった。

総合研究棟Aで行われた体験授業「本物のチャンピオンになってほしい」には、小中高生とその家族ら約30人が参加。主催した渡部厚一准教授（体育系）が、ドーピングの歴史や危険性、倫理上の問題などを紹介したほか、2012年のロンドン五輪柔道男子60キロ級で銀メダルを獲得した平岡拓晃（ひろあき）さん（スポ医3年）が特別講師として登壇し、ドーピングを行う背景には勝利への過度なこだわりがあることや、競技を楽しむことなどにあるという意識を作り上げることが、ドーピングの根絶につながると語った。

質疑応答では、参加した女子高校生が、近年問題視されている細胞や遺伝子などの調整で競技力を高めるなどの「遺伝子ドーピング」について、専門的な質問を行い、渡部准教授や平岡さんを驚かせる場面もあった。

講義後、栃木県から訪れた小学生は、「ドーピングをしてはいけないということがよく分かった」と話した。平岡さんは「ドーピングはスポーツの価値を無くしてしまう。これからもスポーツの本当の価値を伝え、ドーピングの根絶に向け活動していきたい」と話した。（益本健大、写真も、12面に関連写真）

ドーピング根絶の重要性について語る平岡さん（4月22日、総合研究棟Aで）

「結2号」の受信体験会

衛星の電波受信 試みる

筑波大学生が中心となって製作し、今年1月に宇宙に打ち上げられた人工衛星「ITF−2（結2号）」から小中高生が電波を受信する体験会が4月22日に行われた。同衛星はモールス信号でメッセージを発信するため、同衛星を製作した結プロジェクトは広く受信を呼び掛けていた。今までの受信報告はアマチュア無線家からが中心であったが、今回は小中高生が自らアンテナを作ることで、受信することを試みた。

「ITF−2」からの電波の受信を試みる参加者ら（4月22日、中央公園で）

つくばイノベーションプラザ（つくば市吾妻）で参加者が製作したアンテナは、八木アンテナと呼ばれ、主にテレビの電波受信に使われる。土台となる段ボールに、針金を通して作り、誰でも安価で購入できる専用の機械でパソコンに繋ぐことで電波を受信できる。

体験会ではこのアンテナを利用し、同日午後4時ごろ衛星が日本上空を通過するのに合わせ中央公園（つくば市吾妻）で電波受信を試みた。だが衛星に一時的に問題が発生し、電波が届かなかったため衛星に電波を送信する筑波大のアンテナから電波を発信。参加者はその受信に成功した。参加者は受信したモールス信号の解読も行った。

参加した男子中学生は「アンテナを作ったり受信することが楽しかった。また参加したい」と話した。体験会の担当者の結プロジェクトの神永守さん（工シス4年）は「残念ながら衛星からの電波は受信できなかったが、子どもたちの人工衛星に対する興味を引き出せるきっかけを作れたと思う」と話していた。

（佐藤巧基、写真も）

purplume

2本の縄が織りなす技

ある日曜日の夕暮れ、武道館に集まる学生たち。取り出した2本の縄を手に、グループになり音楽に合わせて軽やかなステップを踏みながら縄を跳び始める。彼らはダブルダッチサークル「purplume」の会員だ。

ダブルダッチとは、2本の縄を使い複数人で行う縄跳びのこと。彼らはダンスやアクロバットを自由に取り入れるパフォーマンスを中心に行っている。

全員での練習は水曜と日曜の夕方、中央体育館や武道館の一角で行う。会員は2、3年生合わせて21人。体を動かしたい人から全国レベルの大会に出場する人までさまざまだが、全体の目標は、雙峰祭の舞台で全員でパフォーマンスすることだ。

パフォーマンスの練習に励む会員たち（4月23日、武道館で）

会員のほとんどは、大学からダブルダッチを始めた。指導者はいないため、基本の跳び方からバク宙などの大技まで、先輩から教わる。アクロバット未経験の女子学生でも半年ほどでバック転ができるようになるという。

記者もダブルダッチを体験した。なんとか縄は跳べたが、少しでも体の向きを変えようとすると、後から回ってくる縄が見えず、すぐに引っかかってしまう。縄跳びにダンスやアクロバットなどが加わることを考えると、パフォーマンスをする難しさがよく分かった。

全国レベルの大会に出場する会員もいる。大会の約3カ月前から、パフォーマンスや曲の構成を考え始める。動画投稿サイトに掲載されている他団体のパフォーマンスを参考にして構成を考えたり、曲のテンポを技に合わせて変えるなど、試行錯誤を重ねる。大会前になると、ほぼ毎日チームで練習を行う。

「以前1年生チームで出場した先輩のパフォーマンスを越えることが目標だった」と話すのは会員の横津佑典さん（社学2年）。1年生だけのチームで全国レベルの大会に出場した。チームには大会に出ることが初めての人もおり、パフォーマンスの構成や技に苦労した。とくにバック転をする大技は「最初はうまくいかず、何度も練習を重ねた」。猛練習の甲斐あって、本番では見事成功。「達成感もひとしおで、演技が終わった後は思わず泣いてしまった」と横津さんは感慨深げに話す。

代表の永須和馬さん（物理3年）は、「ダブルダッチの醍醐味は、完璧にパフォーマンスを終えた時の達成感」と話す。ダブルダッチは、ミスをすると縄に引っかかり演技が中断する一発勝負。「その分完璧にパフォーマンスを終えたときの達成感がたまらない」。永須さんはそう語る。

縄跳びから生まれる技の数々。2本の縄が織りなすパフォーマンスに、目が離せない。（秋田耕平＝社会学類2年、写真も）

Who's Who?

写真を売りながらママチャリで日本一周

河津晃平 さん（生資3年）

「この写真がお気に入りです」と話す河津さん（4月18日、中央図書館で）＝横山瑞樹（社会学類1年）撮影

昨年7月から長期休みを使ってシティサイクル（ママチャリ）で日本一周し、各地で撮影した写真を道中売り歩いた。被写体は風景や同じように日本一周をする旅人など幅広く、半年間の旅で1万2千枚を撮った。買い手の言い値で販売したが、旅の後半では売り上げで旅費を賄えるほどになるなど、行く先々で好評だった。

「社会に出たら長い休みは取れない。旅先の風景を撮りながら、ゆっくり旅をしたい」。夏休み中に日本一周する予定でつくばを出発し、まずは東北や北海道を巡った。

荷物は愛用の一眼レフにテント、寝袋、自炊道具と一日分の着替えのみ。ママチャリの後ろの荷台にくくり付けた。朝は日が昇る頃に出発し、日中は写真を撮りながら進む。日が沈みだすと泊まる場所を決めてテントを張り、携帯用の炊飯器で米を炊いた。

旅はまさに「山あり谷あり」。9月には群馬と長野の県境にある標高2172㍍の峠を見晴らしていたこともある。台風が現地を直撃していたが、気に留めずに峠越えに挑戦した。しかし、暴風雨で頂上に着くまでに体や荷物は全て濡れ、頂上では国道が通行止めで身動きが取れなくなった。頂上の気温は夜には7度近くになる。落ち葉や枝木などを燃やそうとしたが火がつかず、持ち物の中で唯一燃やせたのは、表面しか濡れていなかった板チョコレート。小さな火のぬくもりを頼りに一晩を明かした。「今は笑い話にできるいい経験だが、当時は本当に死ぬかと思った。

旅先で出会った旅人を撮影
仲間さえいれば幸せ

夏休みでは東日本しか回れず、12月につくばを再出発。4月まで西日本を旅した。

写真を売り始めたのはそれから。夏に北海道で出会った、同じく日本一周しながら写真を売って生計を立てる大学生と知り合ったことがきっかけだ。自転車で旅をしていると、天候を何より気遣う。空の写真を多く撮ることにした。夕焼けや変わった雲、霧とその合間から見える遠くの森……。幻想的な風景写真は好評で、励ましの意を込めて1万円以上で買ってくれる人もいた。「ありがたかった以上に、それを機に多彩な人々と交流を深めることができる喜びが大きかった」。

旅の後半では、同じように旅をしている人も撮り始めた。お遍路をしながら日本一周する人や、四国を9年近くかけて何周もする人など、さまざまな旅人に出会った。「一途に旅を続ける彼らは、奇麗な風景に負けないほど輝いていた」。

ゴール地点は、旅を応援してくれていた友人らに委ねようと、ツイッターでの投票で決めた。つくば駅や筑波山なども選択肢に入れたが、最も票が入ったのは「富士の樹海」として有名な青木ケ原樹海。すでに茨城県に戻ってきていたが、再び梨県へ向かった。

「ゴールの瞬間は最高に気持ちよかったが、もっと世界中を走りたいと思いが湧いてきた」。

旅を終えて家に帰ると、「いらないものばかりある」と感じた。旅中は出会いと刺激に満ちあふれ、ものがなくても幸せだった。「仲間が何より大切だと気付いた。彼らがいれば、ものはなくても幸せだと実感した」。

「一生旅をしたい。そして旅先で偶然出会う風景や人を撮りたい」。将来は世界を旅したいという。

一度やりたいと感じたことは、とことんやる。そんな彼が撮る写真は、これからも人々を魅了し続けていく。

（佐藤巧基＝物理学類2年）

編集後記

子どもの頃、よく夜空を見上げながら歩いていました。何百光年も離れているであろう星の輝き。気の遠くなるような距離感と底の見えない世界に心を奪われ、一晩中宇宙に思いを馳せていたことを思い出します▼宇宙の謎の解明は、日進月歩の勢いで進んでいます。2面で報じた筑波大学の研究グループは、今までも幸せだった。彼らがいれば、ものは観測不可能だった宇宙全体の銀河の7割を占める「暗黒銀河」を観測しようと、南極に天体望遠鏡の建設を試みています。完成すれば銀河誕生の謎の解明がまた一歩近付きます▼筑波大生が中心となり製作した人工衛星「結2号」にもニュースがありました。衛星からの電波を受信する体験会が開催され、小中高生が自作のアンテナで、受信を試みました。（11面）▼子どもの頃に見上げた宇宙の世界は、今では少しだけ近く感じられる気がします。（副編集長・佐々木悠里＝人文学類3年）

次号は **7月10日（月）** 発行予定です

スポーツ

関東学生選手権春季トーナメント

決勝で皆中を決めた川畑竣哉（5月5日、東京武道館で）＝秋田耕平撮影

9面へ

スポーツ

関東大学春季大会

相手のディフェンスを抜け、力走する鈴木啓太（4月30日、三ツ沢公園球技場で）＝岡田優太撮影

9面へ

学生生活

アンダーアーマー直営店開店

開店初日、たくさんの学生でにぎわう店内（4月19日、アンダーアーマーポップアップストア筑波大学で）＝佐々木悠里撮影

10面へ

学生生活

キッズ・ユニバーシティ

子どもと話す平岡宏晃さん（4月22日、総合研究棟A棟で）＝益本健太撮影

11面へ